高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集

天ヶ城跡 下巻

地域づくり事業（天ヶ城公園整備）に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1998. 3

宮崎県高岡町教育委員会

天ケ城跡下巻　正誤表

項	行	誤	正
１０	２	段	稜
１０	２３	川原石	礫層産出礫
１０	２９	川原石	礫層産出礫
２１	７	溝のテラス状	テラス状
５３	１２	面してあり	面しており

高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集

天ヶ城跡 下巻

地域づくり事業（天ヶ城公園整備）に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1998. 3

宮崎県高岡町教育委員会

凡　例（下巻）

1　表１ 掘立柱建物跡計測表

- 長さの単位は「m」である。

2　表２ 出土遺物観察表

- 「調整」欄における番号は下記の通りである。
  ①口唇部　②口縁部　③体部（胴部）　④底部
- 法量の単位は「cm」である。
- 土器の色調は農林水産省農林水産技術会事務局監修による標準土色帳による。
- 胎土については、鉱物名は使用していない。

3　表4 出土遺物集計表

- 土師器皿類の分類の基準は下記の通りとした。
  皿は器高３cm未満、口径10～12cm程度。
  小皿は器高２cm未満、口径８cm前後。
  杯は器高３cm以上、口径12cm以上。
  体部は「不明」で一括した。
- 個体は、完形でなくても口縁部から底部まで器形がわかるものはその中で扱った。
- 「その他の国産陶磁器」は、産地が限定できないものを一括した。

4　溝状遺構の遺構図は付図のみとし、その断面図（第６．７図）の位置関係も付図に記している。

5　第10～16図における pit 右上の数字は pit 番号を表わす。また本文中の pit 番号については数字の先頭に「P」の文字を付けている。（例　P1）

目　次

天ヶ城跡　下巻　目次

Ⅰ　歴史時代の調査 ……9
第１節　概　　要 ……9
第２節　遺構と遺物 ……9

Ⅱ　高岡の歴史と天ヶ城 ……35
第１節　天ヶ城築城以前の高岡 ……35
第２節　高岡郷成立と天ヶ城 ……39

Ⅲ　ま　と　め ……53

付録目次

付録　「天ヶ城」関係資料 ……00

挿図目次

第１図　遺跡の旧地形と区割図 ……9
第２図　天ヶ城跡遺構配置図 ……11～12
第３図　土坑実測図(1) ……13
第４図　土坑実測図(2) ……14
第５図　土坑出土遺物実測図 ……15
第６図　溝状遺構断面図(1) ……16
第７図　溝状遺構断面図(2) ……17
第８図　溝状遺構出土遺物実測図(1) ……19
第９図　溝状遺構出土遺物実測図(2) ……20
第10図　掘立柱建物跡実測図(1) ……22
第11図　掘立柱建物跡実測図(2) ……23
第12図　掘立柱建物跡実測図(3) ……24
第13図　掘立柱建物跡実測図(4) ……25～26
第14図　掘立柱建物跡実測図(5) ……27～28
第15図　掘立柱建物跡実測図(6) ……29
第16図　柵列跡実測図 ……31
第17図　ピット内出土遺物実測図 ……32
第18図　高岡町内山城分布図 ……54
第19図　天ヶ城跡中心部旧地形図 ……55
第20図　天ヶ城跡遺構変遷図 ……58

付図　天ヶ城跡遺構図

表　目　次

表１　掘立柱建物跡計測表 ……30
表２　出土遺物観察表 ……32
表３　「高岡名勝志」に見る天ヶ城の曲輪の大きさ …42
表４　出土遺物集計表 ……56
表５　報告書登録抄 ……76

写真図版目次

図版１　調査区調査前遠景と天ヶ城全景（東から）、１区遠景と天ヶ城全景（北から）……63
図版２　曲輪12近景（東から）、曲輪11近景（南から）、大手門跡（南から）……64
図版３　曲輪13近景（北から）、堀Ｆ近景（北から）、搦手門周辺から下を見る（北から）……65
図版４　１区全景（西から）、１区全景……66
図版５　３区全景（西から）、３区全景……67
図版６　４区全景、５区全景 ……68
図版７　１号土坑、　３号・４号土坑（北から）、３号土坑（北から）……69
図版８　４号土坑（南から）、２号土坑、１号溝（南から）……70
図版９　１号溝東側断面（東から）、２号溝（南から）、６号溝南側（西から）……71
図版10　６号溝西側（東から）、６号溝西側断面（東から）、６号溝南側断面（北から）……72
図版11　６号溝南側遺物出土状況（南から）、５号・６号建物跡、８号建物跡（西から）……73
図版12　出土遺物(1) ……74
図版13　出土遺物(2) ……75

天ヶ城跡　上巻　目次

Ⅰ　はじめに ……11
第１節　調査に至る経過 ……11
第２節　調査組織 ……11

Ⅱ　遺跡の概要 ……12
第１節　遺跡の環境 ……12
第２節　遺跡の概要 ……17

Ⅲ　縄文時代の調査 ……20
第１節　概　　要 ……20
第２節　遺構と遺物 ……20

Ⅳ　分　　析 ……187

Ⅴ　ま　と　め ……207

挿図目次

第１図　凡例略図 ……6
第２図　高岡町遺跡分布図 ……13～14
第３図　遺跡周辺地形図 ……16
第４図　遺跡の旧地形と区割図 ……18
第５図　基本層序柱状図 ……19
第６図　縄文時代遺構配置図 ……21～22
第７図　縄文時代焼礫分布図 ……23
第８図　集石遺構実測図(1) ……25
第９図　集石遺構実測図(2) ……26
第10図　集石遺構実測図(3) ……27
第11図　土坑実測図(1) ……32
第12図　土坑実測図(2) ……33
第13図　土坑実測図(3) ……34
第14図　土坑実測図(4) ……35
第15図　土坑実測図(5) ……36
第16図　遺構内出土遺物実測図 ……39
第17図　包含層出土遺物分布状況図 ……41～42
第18図　包含層出土遺物実測図(1) ……50
第19図　包含層出土遺物実測図(2) ……51
第20図　包含層出土遺物実測図(3) ……52
第21図　包含層出土遺物実測図(4) ……53
第22図　包含層出土遺物実測図(5) ……54
第23図　包含層出土遺物実測図(6) ……55
第24図　包含層出土遺物実測図(7) ……56
第25図　包含層出土遺物実測図(8) ……57
第26図　包含層出土遺物実測図(9) ……58
第27図　包含層出土遺物実測図(10) ……59
第28図　包含層出土遺物実測図(11) ……60
第29図　包含層出土遺物実測図(12) ……61
第30図　包含層出土遺物実測図(13) ……62
第31図　包含層出土遺物実測図(14) ……63
第32図　包含層出土遺物実測図(15) ……64
第33図　包含層出土遺物実測図(16) ……65～66
第34図　包含層出土遺物実測図(17) ……67
第35図　包含層出土遺物分布図(1) ……68
第36図　包含層出土遺物分布図(2) ……69
第37図　包含層出土遺物分布図(3) ……70
第38図　包含層出土遺物分布図(4) ……71
第39図　包含層出土遺物分布図(5) ……72
第40図　包含層出土遺物分布図(6) ……73
第41図　包含層出土遺物分布図(7) ……74
第42図　包含層出土遺物分布図(8) ……75
第43図　包含層出土遺物分布図(9) ……76
第44図　包含層出土遺物分布図(10) ……77
第45図　包含層出土遺物分布図(11) ……78
第46図　包含層出土遺物分布図(12) ……79
第47図　包含層出土遺物分布図(13) ……80
第48図　包含層出土遺物分布図(14) ……81
第49図　包含層出土遺物実測図(18) ……82
第50図　包含層出土遺物実測図(19) ……83
第51図　包含層出土遺物実測図(20) ……84
第52図　包含層出土遺物実測図(21) ……85
第53図　包含層出土遺物実測図(22) ……86
第54図　包含層出土遺物実測図(23) ……87
第55図　包含層出土遺物実測図(24) ……88
第56図　包含層出土遺物実測図(25) ……89
第57図　包含層出土遺物実測図(26) ……90
第58図　包含層出土遺物実測図(27) ……91
第59図　包含層出土遺物実測図(28) ……92
第60図　包含層出土遺物実測図(29) ……93
第61図　包含層出土遺物実測図(30) ……94
第62図　包含層出土遺物実測図(31) ……97
第63図　包含層出土遺物実測図(32) ……96
第64図　包含層出土遺物実測図(33) ……97
第65図　包含層出土遺物実測図(34) ……98
第66図　包含層出土遺物実測図(35) ……99
第67図　包含層出土遺物分布図(15) ……101
第68図　包含層出土遺物分布図(16) ……102

第69図　包含層出土遺物分布図(17) ……103
第70図　包含層出土遺物分布図(18) ……104
第71図　包含層出土遺物分布図(19) ……105
第72図　包含層出土遺物分布図(20) ……106
第73図　包含層出土遺物分布図(21) ……107
第74図　包含層出土遺物分布図(22) ……108
第75図　包含層出土遺物分布図(23) ……109
第76図　包含層出土遺物分布図(24) ……110
第77図　包含層出土遺物分布図(25) ……111
第78図　包含層出土遺物分布図(26) ……112
第79図　包含層出土遺物分布図(27) ……113
第80図　包含層出土遺物分布図(28) ……114
第81図　包含層出土遺物分布図(29) ……115
第82図　包含層出土遺物分布図(30) ……116
第83図　包含層出土遺物分布図(31) ……117
第84図　包含層出土遺物分布図(32) ……118
第85図　包含層出土遺物分布図(33) ……119
第86図　包含層出土遺物分布図(34) ……120
第87図　包含層出土遺物分布図(35) ……121
第88図　包含層出土遺物分布図(36) ……122
第89図　包含層出土遺物分布図(37) ……123
第90図　包含層出土遺物分布図(38) ……124
第91図　包含層出土遺物分布図(39) ……125
第92図　包含層出土遺物分布図(40) ……126
第93図　包含層出土遺物分布図(41) ……127
第94図　包含層出土遺物分布図(42) ……128
第95図　包含層出土遺物分布図(43) ……129
第96図　包含層出土遺物分布図(44) ……130
第97図　包含層出土遺物実測図(36) ……131
第98図　包含層出土遺物実測図(37) ……132
第99図　包含層出土遺物実測図(38) ……133
第100図　包含層出土遺物実測図(39) ……134
第101図　包含層出土遺物実測図(40) ……135
第102図　包含層出土遺物実測図(41) ……136
第103図　包含層出土遺物実測図(42) ……137
第104図　包含層出土遺物実測図(43) ……138
第105図　包含層出土遺物分布図(45) ……139
第106図　包含層出土遺物分布図(46) ……140
第107図　Ｌ７グリット黒耀石出土状況図 ……141
第108図　包含層出土遺物石材分布図(1) ……142
第109図　包含層出土遺物石材分布図(2) ……143
第110図　包含層出土遺物石材分布図(3) ……144
第111図　包含層出土遺物石材分布図(4) ……145
第112図　包含層出土遺物石材分布図(5) ……146
第113図　黒耀石原産地 ……188

表　目　次

表１　集石遺構構成礫重量百分率(1) ……28
表２　集石遺構構成礫重量百分率(2) ……29
表３　黒耀石原産地重量百分率 ……147
表４　出土石器石材別集計表 ……147
表５　包含層出土土器観察表(1) ……149
表６　包含層出土土器観察表(2) ……168
表７　包含層出土土器観察表(3) ……175
表８　包含層出土土器観察表(4) ……180
表９　包含層出土土器観察表(5) ……181
表10　包含層出土土器観察表(6) ……183
表11　包含層出土石器計測表 ……185
表12　各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……191
表13　九州西北地域原産地採取原石が各原石群に同定される割合の百分率（%） ……192
表14　天ヶ城跡出土黒耀石の元素比分析結果 ……195
表15　天ヶ城跡出土の黒耀石製遺物の現在産地推定結果　201
表16　天ヶ城跡出土の黒耀石製遺物の原石産地別頻度分布　206
表17　天ヶ城跡縄文早期出土遺物集計表 ……208
表18　天ヶ城跡出土押型文土器（山形文・楕円文）原体計測表 ……210
表19　天ヶ城跡出土土器法量値別数量表 ……213

写真図版目次

図版１　調査前全景(南から)、１区全景(東から) ……119
図版２　１区全景、１区西側（北から)、１区西側礫群出土状況（北から） ……220
図版３　２区全景（北から)、３区北側（東から)、３区南側（南から） ……221
図版４　４区全景、５区全景（西から)、１号集石遺構 …222
図版５　３号集石遺構、４号集石遺構、５号集石遺構 …223
図版６　６号集石遺構、７号集石遺構、８号集石遺構 …224
図版７　９号集石遺構、10号集石遺構、11号集石遺構 …225
図版８　11号集石遺構底石、12号集石遺構、13号集石遺構　226
図版９　14号集石遺構、15号集石遺構、16号集石遺構 …227
図版10　17号集石遺構、17号集石遺構底石、18号集石遺構　228
図版11　19号集石遺構、20号集石遺構、１号土坑 ……229
図版12　２号土坑、３号土坑、４号土坑 ……230
図版13　土坑(1) ……231
図版14　土坑(2) ……232
図版15　黒耀石（Ｌ７グリット）出土状況、遺物出土状況(152)、遺物出土状況（529） ……233
図版16　出土遺物(1) ……234
図版17　出土遺物(2) ……235
図版18　出土遺物(3) ……236
図版19　出土遺物(4) ……237
図版20　出土遺物(5) ……238
図版21　出土遺物(6) ……239
図版22　出土遺物(7) ……240

Ⅰ　歴史時代の調査

第１節　概　　要

調査は工事の工程に伴い１区から５区に分けておこなった。調査面積は、歴史時代が約7,000㎡であった。

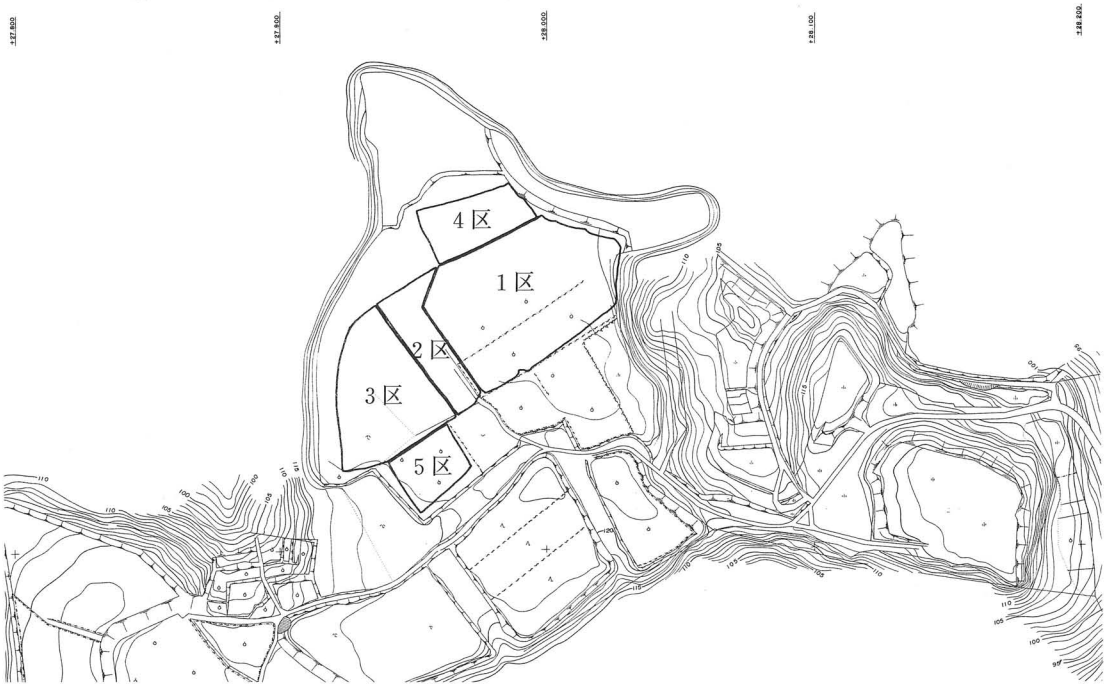
歴史時代の調査では、遺構は土坑が10基、掘立柱建物跡９棟、溝状遺構８条を検出し、遺物は土師器皿をはじめ瓦質土器、須恵質土器、青磁や染付などの輸入陶磁器、国産陶器、土錘、軒平瓦、軒丸瓦、鉄製品が出土した。まず、東西と南北に軸をもつＬ字状の溝が二条検出された。そのうちの一条が断面Ｖ字状の溝で、それに囲まれて２間×４間の２面庇と２間×５間の３面庇の掘立柱建物跡（２棟とも総柱）が検出された。さらにその溝が短時間で埋め戻され、その上に２間×５間の４面庇なども含め３棟の掘立柱建物跡が検出された。また、土坑は10基確認した。それ以上に存在したことは間違いないと思われるが、かなりの量の攪乱坑が入り、土坑の形状がほとんど確認できないものが多かった。また、調査区西側は上層面の攪乱が激しく耕作土を剥ぐとＶ層が露呈していた。そのため、中近世の遺構検出はＶ層面でおこなった。歴史時代の検出遺構の時期は、中近世を中心とするが大きく分けて４時期からなる。地形は、Ｋ８グリットからＫ11グリットはＶ層まで掘削されⅥ層が露呈する。

第２節　遺構と遺物

１　土坑

１号土坑（３図）

Ｅ13グリットで検出された。長軸1.8m、単軸0.7mの隅丸長方形を呈する。床面は長軸1.08m、単軸



第１図　遺跡の旧地形と区割図

0.38mで平坦である。壁面は長軸側約75度、単軸側はほぼ垂直にそれぞれ立ち上がる。残深1.12mで、床面から約0.9m立ち上がったところで段を有し、ややラッパ状となる。埋土は暗灰茶褐色弱粘性土で木棺等の痕跡は確認できず、形状からみて土壙墓であろうと思われる。遺物は第５図の１と２の２点のみが床面から約0.15m上のあたりで出土した。１は、土師器の杯である。口径12.8cm、器高4.9cmをはかり、底部はやや丸味を帯び口縁部はまっすぐ開く。底部切り離しは回転利用のヘラ切りである。２は土師器の甕である。口縁部は18.2cmをはかり、断面「く」字状に屈折する。外面はナデ調整のみで内面は胴部から頸部にかけて下から上方向へのヘラケズリ調整である。

２号土坑（４図）

Ｊ８グリットで検出された。北西側を攪乱坑により削平を受けているが、長軸約2.4mの楕円形状を呈する。床面は平坦気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰茶色弱粘性土である。遺物は出土していない。

３号土坑（３図）

Ｊ10グリットで出土した。長軸1.2m、残深1.8mの土坑である。床面は平坦であるが、南東側に長軸0.4m、単軸0.3m、深さ0.12mのピット状の落ち込みがある。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、灰茶色弱粘性土であるが、礫（小礫）等は全く見られなかった。遺物は第５図の３が出土した。３は唐津焼の底部片で、底部外面は施釉がない。16世紀末から17世紀初頭のものである。その他の遺物は、土師器の杯の底部片（底部切り離しは回転利用のヘラ切り）で、器形は底部から胴部にかけては稜線をつくり屈折する。

４号土坑（３図）

Ｊ10グリットで検出され、３号土坑の東側に位置する。長軸1.54mの丸みを帯びた縦長の台形状を呈する。床面は平坦で、１辺が0.78mの方形状に近いプランを呈する。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、残深1.88mをはかる。土坑内からは0.75mほど掘削したところから礫が密集して検出された。礫はいずれも砂岩質の川原石で、礫の規模は拳大より一回りほど大きなものから縄文時代の台石に使用されるような大きな礫まで様々である。礫の堆積は特に規則性はなく一括投棄したようである。礫に焼成痕は見当たらない。埋土は３号土坑と同じで灰茶色弱粘性土であるが、遺物は全く出土しなかった。

５号土坑（３図）

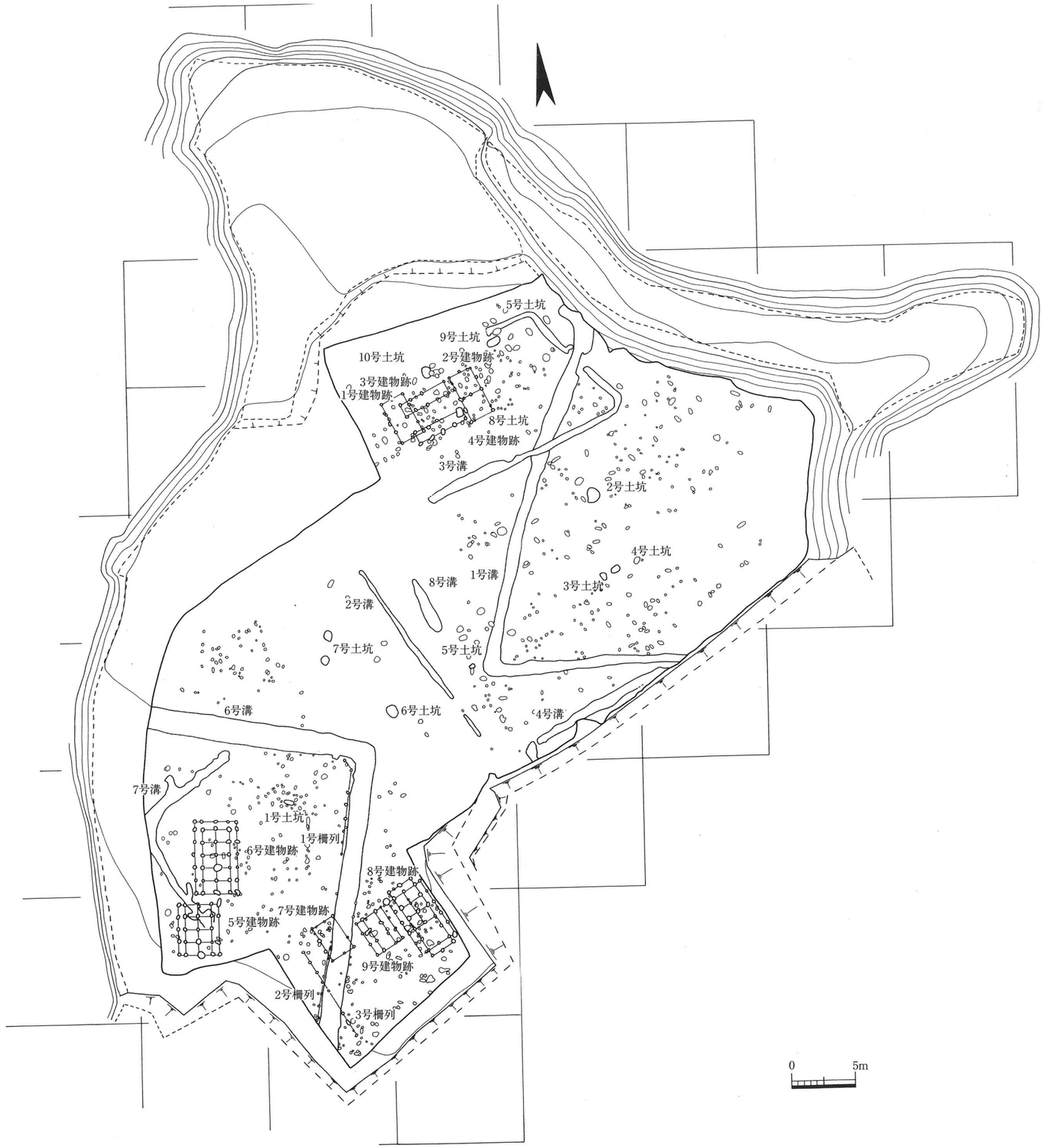
Ｈ11グリットで検出された。長軸約1.24m、短軸約1.0mの楕円状のプランを呈する。床面は平坦で、壁面は残深1.92mをほぼ垂直に立ち上がる。この土坑からも４号土坑同様密集して堆積する礫が検出された。それらの礫は砂岩質の川原石で、大きさも４号土坑と同じように様々である。埋土は灰茶色弱粘性土で、遺物は出土しなかった。プランは４号土坑よりは小さいものの、同じような性格の遺構であろうと思われる。

６号土坑（４図）

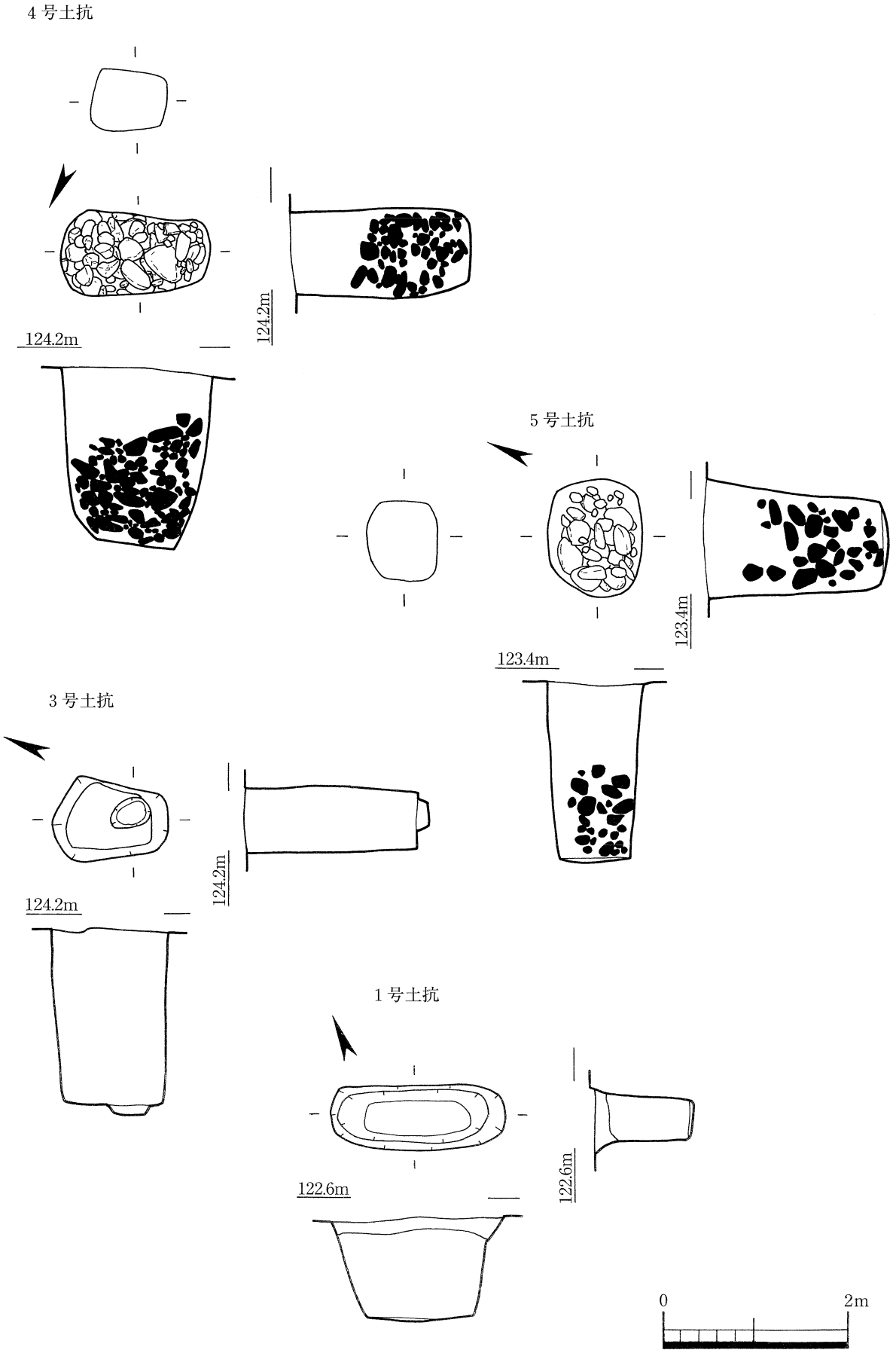
Ｇ12グリットで検出された。長軸2.12m、短軸1.6mの楕円状の土坑である。床面は平坦で、長軸1.04m、短軸0.72mをはかる。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰茶色弱粘性土で、遺物の出土はない。

７号土坑（４図）

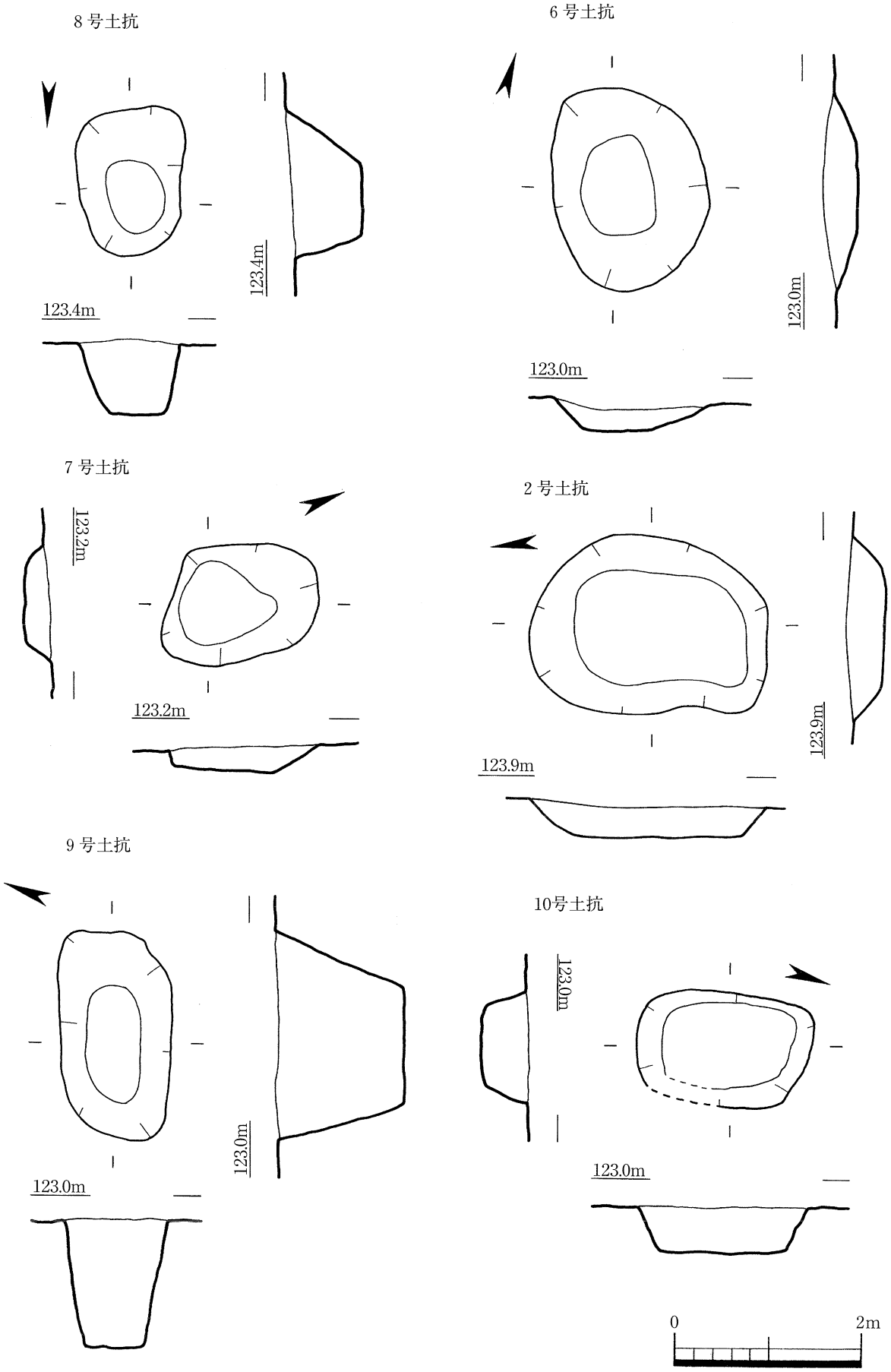
Ｆ10グリットで検出された。長軸1.52m、短軸1.24mの土坑である。床面は平坦で、不定型なプランを呈する。壁面は南側が垂直気味に北側が緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰茶色弱粘性土で、遺物の出



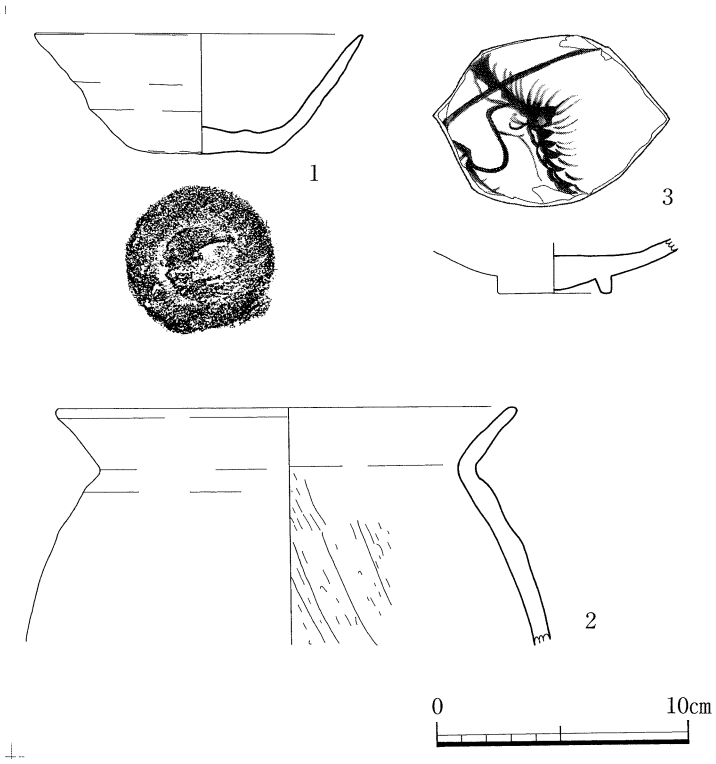
第２図　天ヶ城跡遺構配置図


4 号土抗
124.2m
124.2m
5 号土抗
123.4m
123.4m
3 号土抗
124.2m
124.2m
1 号土抗
122.6m
122.6m
0
2m

第 3 図　土抗実測図(1)


8 号土抗
123.4m
123.4m
6 号土抗
123.0m
123.0m
7 号土抗
123.2m
123.2m
2 号土抗
123.9m
123.9m
9 号土抗
123.0m
123.0m
10号土抗
123.0m
123.0m
0
2m

第 4 図　土抗実測図(2)



第５図　土抗出土遺物実測図

土はない。

８号土坑（４図）

Ｈ７グリットで検出された。長軸1.56mの土坑で、床面は長軸0.76m、短軸0.56mの楕円状となる。壁面は約55～70度の傾斜で残深0.72mを立ち上がる。この場所に４号建物跡に伴う柱穴が存在したと思われるが、この土坑により削平されている。

９号土坑（４図）

Ｈ６グリットで検出された。長軸2.12m、短軸0.96mの隅丸長方形を呈する。床面は長軸1.72m、短軸0.56mをはかる。壁面は残深1.32mを約75度の傾斜で立ち上がる。形状から土壙墓と思われるがそれ以上の根拠はない。埋土は暗灰茶色弱粘性土で、遺物の出土はない。

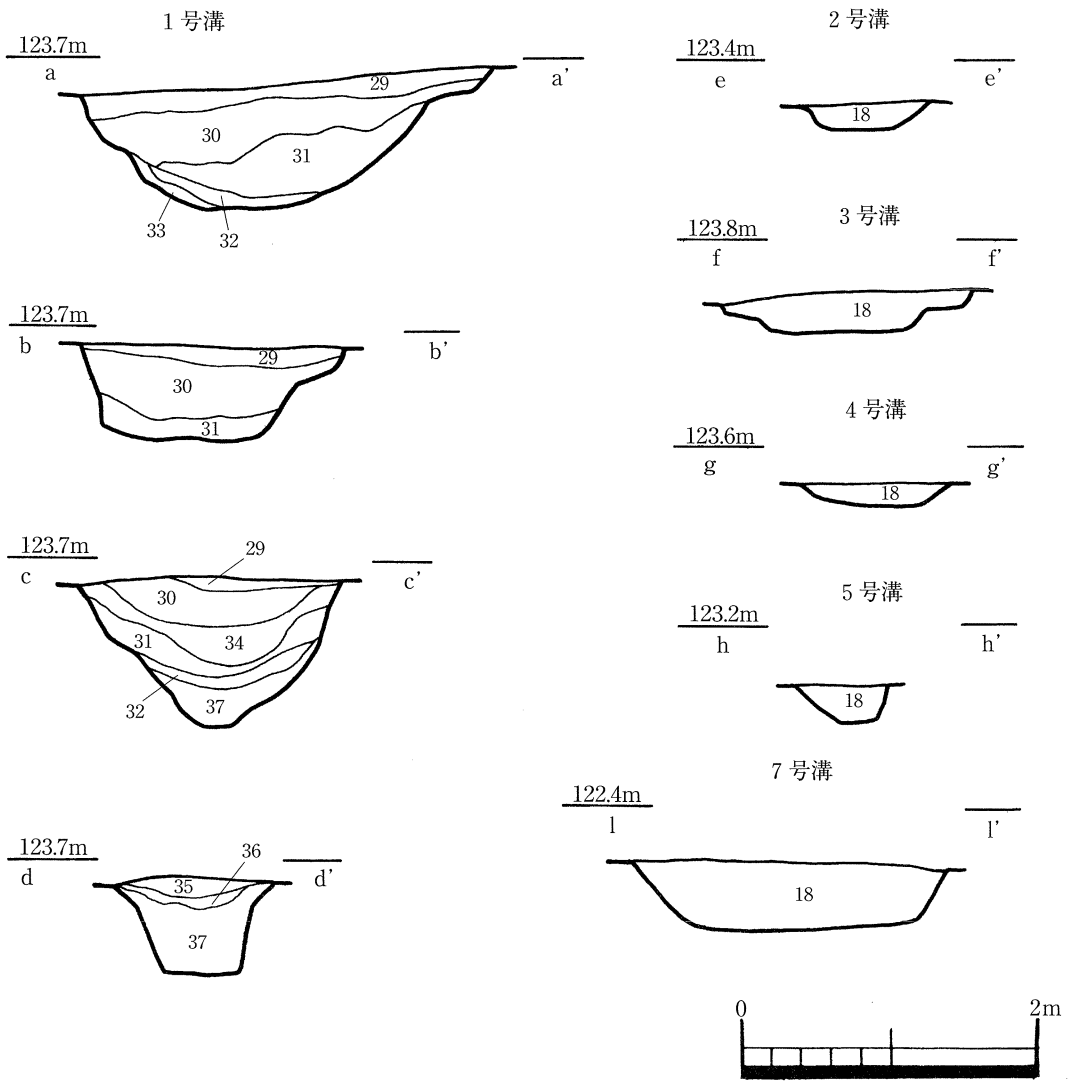
10号土坑（４図）

Ｇ６グリットで検出された。長軸1.84m、短軸1.2mの長方形状の土坑である。南東側をピットにより削平される。床面は長軸1.32m短軸0.84mをはかる。壁面は残深0.48mを約70度の傾斜で立ち上がる。埋土は暗灰茶色弱粘性土で、遺物の出土はない。

２　溝状遺構

１号溝（６図・付図１）

調査区東側でＬ字状に延びる溝である。全長約86m、最大幅約２mである。この溝の南側は東西方向に軸をもち、東側はK11グリットで調査区端に接して途切れるがさらに東側に延びていたものと思われる。西側はH11グリットで方向を変えて北東に軸をおく。溝の南側の幅は１m弱で西側にいくほど徐々に広がりを見せ床面も平坦面が広くなり深さも増す。Ｉ９グリットで東側に溝の軸に沿ってテラス状の段が一段設けられ、その北側には壁面から床面にかけてピットが数カ所ある。Ｉ８グリットで一段低くなり、すぐその北側で３号溝によって切られる。その一段下がったところから溝の幅が広くなるが、Ｊ６グリットで一端狭くなりこの曲輪の端にぶつかる。さらにその曲輪のラインに沿って再び北側に広くなる。下の曲輪に対する虎口的意味合いがあるものと思われるが、その北側の斜面では竪堀などは確認されなかった。また、この溝の床面では硬化面は全く確認されていない。この溝の時期は遺物などから15世紀代が推定され、放棄された時期は３号溝との関係からそれ以前であることは間違いなく、溝の存続期間は城の改築に因るところが大きい。それは、Ｉ７グリットからH10グリットにかけて、埋土が溝の東側から入り込んできている。標高が東側の方が西側と比較し高くなっていることもその原因と受け止められるが、溝の東面すぐのところに土塁状の遺構があった可能性もある。さらにこの溝の南側の埋土は最下層に３７層が堆積する。37層はⅡ層とⅣ層がブロック状に入った層で、その溝の東側で整地に



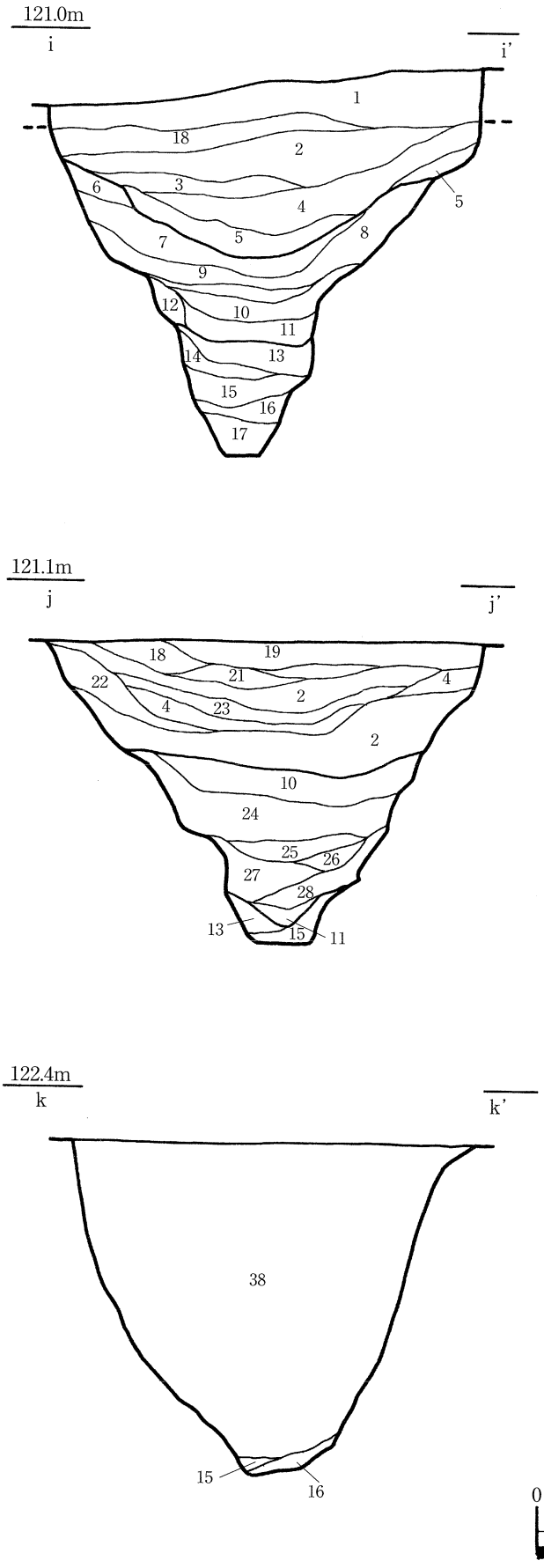
第6図　溝状遺構断面図(1)

よる削平がなされていることを考え合わせれば、新たに造成したときに削平した土砂で溝の南側の部分を一部埋めたと推測できる。

遺物は、30層からは福建省系染付碗のほか土師器の杯、小皿、甕が出土し、31層から下位の層は土師器の杯、小皿、甕などで、輸入陶磁器類は全く出土していない。土師器の杯や小皿は底部切り離しが回転利用のヘラ切り痕のものも若干含まれるが、そのほとんどは回転利用の糸切り痕のものである。4から6は土師器小皿である。底部切り離しは回転利用のヘラ切り痕で、体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。7は土師器皿である。口径10.8cm、器高2.8cmを計り、体部から口縁部にかけてまっすぐ立ち上がる。8から11は土師器の杯で、11が底部切り離しが回転利用の糸切り痕で、それ以外はヘラ切り痕である。体部から口縁部にかけてまっすぐ開くものが多い。

2号溝（6図・付図1）

F10グリットからH11グリットにかけてN－32°－Wに主軸をもつ。全長約25m、幅約0.8mで、検出した溝状遺構の中では一番幅狭な溝である。全体に浅く床面は平坦である。また、南側（H12グリット）に全長約4mの溝が同軸上にあるが北側の溝の延長にあたるものと思われる。埋土は暗灰茶色弱粘性土である。



1　耕作土
2　灰色気味の暗茶褐色土
3　明黄褐色弱粘性土（黄班粒混入）
4　暗黄褐色弱粘性土（黄班粒混入）
5　黒黄褐色弱粘性土
6　暗黄褐色弱粘性土
7　黄褐色弱粘性土（黄班粒混入）
8　褐色弱粘性土
9　明褐色弱粘性土
10　淡黒褐色粘性土
11　にぶい黒褐色粘性土
12　淡褐色粘性土
13　明茶褐色弱粘性土
14　淡茶褐色弱粘性土
15　濁明茶褐色弱粘性土（暗黄色ブロック混入）
16　濁淡黄茶色土（暗黄色ブロック混入）
17　濁黄茶色土（暗黄色ブロック混入）
18　灰黄茶褐色弱粘性土
19　暗黒灰色弱粘性土（黄班混入）
20　暗灰褐色弱粘性土
21　暗灰黄褐色弱粘性土
22　淡灰茶褐色弱粘性土（黄班混入）
23　にぶい灰茶褐色弱粘性土
24　灰色弱粘性土（黄色ブロック混入）
25　淡黒灰色粘性土（黄色ブロック混入）
26　黒灰色粘性土
27　にぶい灰色粘性土（黄色ブロック混入）
28　明黒灰色粘性土（黄色ブロック混入）
29　暗褐色弱粘性土
30　暗褐色弱粘性土（小砂粒とアカホヤ粒混入）
31　淡黒褐色弱粘性土（アカホヤ粒混入）
32　暗茶褐色弱粘性土
33　褐色弱粘性土
34　黒褐色弱粘性土（アカホヤ粒混入）
35　暗青灰色粘性土
36　にぶい黄褐色土
37　茶褐色土と暗黄色土と淡褐色土の混入
38　人為的なブロック状の埋土

第７図　溝状遺構断面図(2)

遺物は底部切り離しが回転利用の糸切り痕の土師器杯や鉢（１２）が出土している。

3号溝（6図・付図1）

調査区北側に位置し、1号から4号建物跡を「L」字状に囲むように巡っている。南側は長さ約1.8m、その西半分は幅約1.9mを計り、テラス状の平坦な段を1段有す。その東側は幅約1mと狭くなりちょうど幅が狭くなるところに拳大程度の大きさの礫が床面に散在する。礫はその東側でＪ７グリットの北西側に屈折するところまで散在するが、根石のような性格のものなのか、それとも何かを固定させるためのものなのか用途ははっきりしない。溝の北西側は1号溝のところで一旦切断するが、これは耕作等による攪乱が原因で、意識的なものではないと思われる。幅は約1mほどで深さは浅い。

遺物は土師器の杯や国産陶器が出土している。19は土師器杯の底部片で回転利用の糸切り痕があり器壁が厚めである。20は鉄絵の唐津系碗で胎土目期のものと思われる。21は17世紀の陶器碗である。

4号溝（6図・付図1）

Ｋ11グリットからＩ12グリットにかけて北東、南西方向に幅1.3m前後で細長く延びる。曲輪内の一段下がりかけたところにあり深さは浅い。Ｉ12グリットでこの溝に対して直角方向に溝が存在するがこの溝も一連のものと思われる。溝の床面にあるピットはこの溝に伴うものであり、柵などの木杭の痕跡かもしれないが根拠はない。この溝の方向性や規模等から考えると3号溝と同じような性格の遺構であろうと思われる。

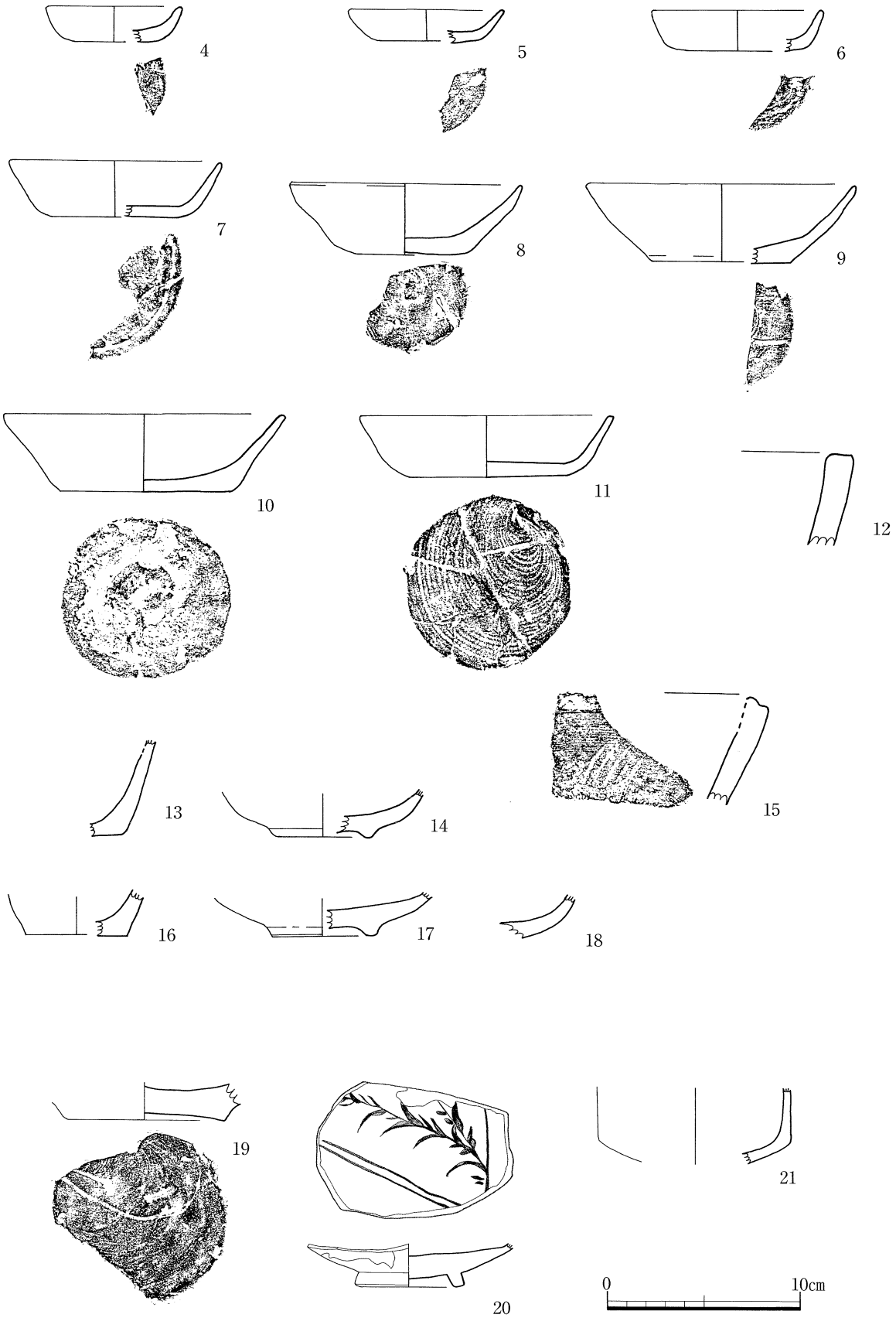
遺物は、土師器杯、土師質擂鉢、軒丸瓦片、国産陶器、輸入陶磁器が出土している。13は肥前系の袋物の底部で16世紀末～17世紀初めである。14は肥前系の皿で体部下半から高台にかけて施釉がまだらになる。16世紀末～17世紀初めのものである。15は土師質の擂鉢で内側に斜方向の刷毛目痕がみられる。

5号溝（6図・付図1）

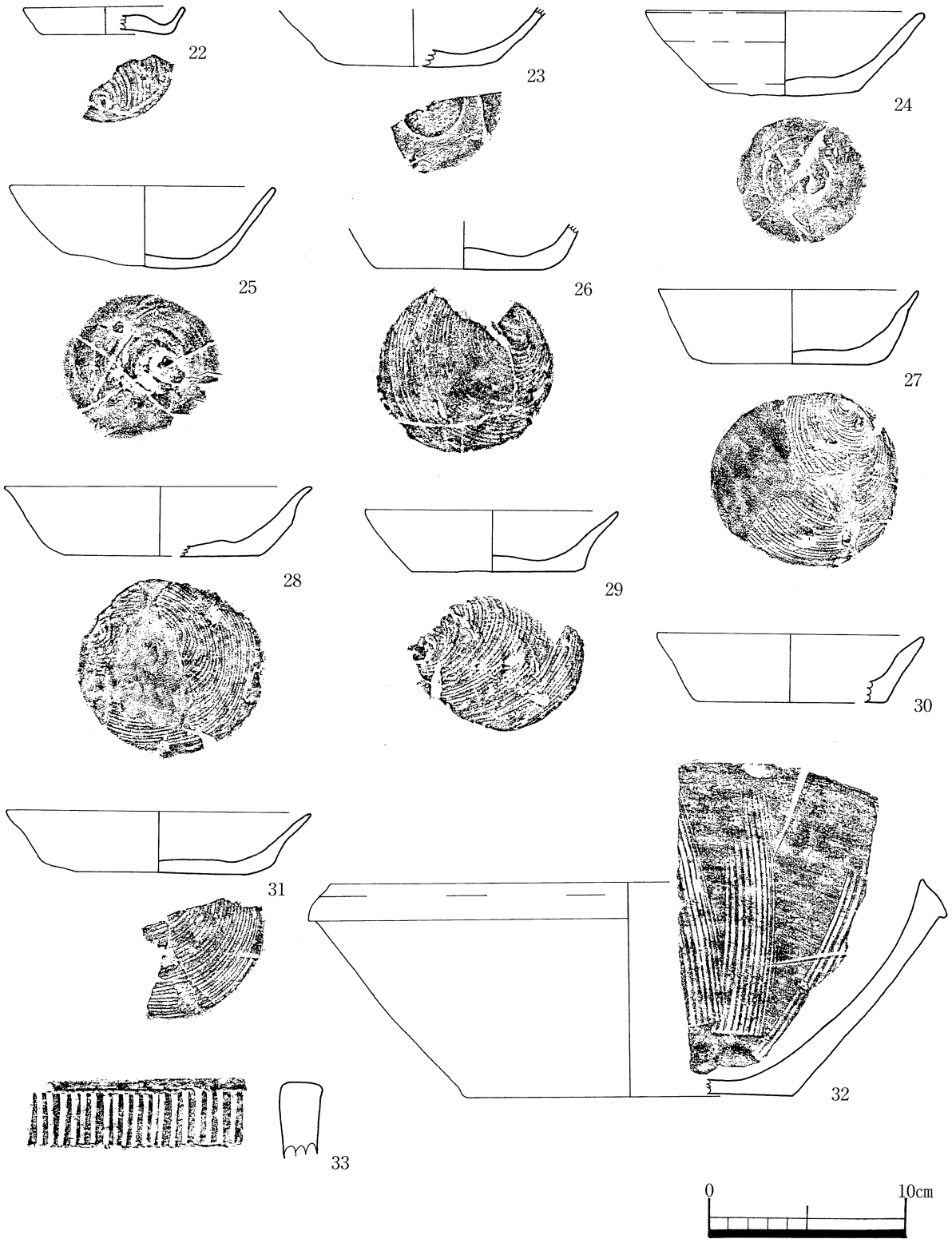
Ｉ６グリットに位置し、3号溝がさらに北西へと延びるような状態であり、3号溝の続きであろうと思われる。Ｉ５グリットで西側に90°屈折し、3号溝の南側部分と平行するように南西方向に延びる。途中で攪乱坑により削平されどこまで延びていたかははっきりしない。遺物は出土していない。

6号溝（7図・付図1）

調査区西側に位置する。東西方向に約35m、南北方向に約45m、Ｆ12グリットで直角気味に曲がり平面Ｌ字状になる。溝の幅は3.5m前後で床面幅は0.5m前後であるため断面Ｖ字状となる。床面には硬化面はなく、通路として使われた確証は得られなかった。埋土状況はＦ12グリット西端を境に西側と東側から南側とで極端に異なる。東側から南側にかけては15層と16層が堆積した後、38層が堆積する。38層は基本層序（上巻記載）にあるⅢ層からⅧ層の土砂がブロック状にしかも一括投棄のような状態で堆積したものである。この堆積後に7号建物が建てられたようであり、この溝の放棄時期は遅くともそれ以前といえる。反対に西側の堆積状況であるが、土層断面「ｊｊ′」は15層を最下層とする。これはこの土層断面付近がこの溝の床面のレベルとして一番高く、反対に溝の西端と南端が低い関係にある。そのため、土層断面「ｉｉ′」では15層の下に16層と17層が堆積する。そして11層の上に土壌化された10層が堆積する。土層断面「ｊｊ′」は10層の下に溝の壁面が崩落した土砂が小さいブロック状となり堆積する。10層から5層にかけては、土層断面「ｉｉ′」では6層から9層が堆積するが土層断面「ｊｊ′」は堆積土がみられない。6層あたりまではそこの南側からの土砂の流入が強く感じられるが、それよりも上層は逆に北側からの流れが強い傾向がある。土層断面「ｊｊ′」よりも西側の堆積土で10層よりも



第８図　溝状遺構出土遺物実測図(1)



第９図　溝状遺構出土遺物実測図(2)

下層においては遺物の出土はなく、しかもその溝検出面内側（南面）に柵列等の遺構が確認できないことから、そのあたりに土塁状の高まりがあり、それが崩落して自然堆積よりも短期間でしかもこのあたりだけ溝の南側（Ｆ12グリット～Ｆ17グリット）とは異なった堆積をしたものと推測する。その場合10層以下もしくは６層以下に堆積した土砂の多くが土塁を形成したものとなる。38層は２層よりも新しく堆積したのは検出状況から明らかであるがそれよりも上層については攪乱などではっきりしない。この遺構の時期を示す遺物は、溝の南側で15層や16層から土師器の杯が数点出土している他は、土層断面「ｉｉ′」の８層左側にある溝のテラス状に段を形成しているところで１５世紀以降と考えられる備前焼の擂鉢片や瓦質の風炉が出土している。そのため、この時期もしくはそれに前後する時期が考えられる。

出土遺物は、土師器杯・小皿、土師質鉢、備前大甕・擂鉢、青磁、白磁、瓦質風炉などが出土している。22は土師器小皿である。底部内側が底部と体部との境で指頭による凹みを有し、底部外面切り離しは糸切り痕である。23から31は土師器の杯で、15・16層で出土した。23から25は底部切り離しがヘラ切り痕で、それ以外は糸切り痕である。24から25は器壁は薄く体部から口縁部にかけてまっすぐ開くように立ち上がる。糸切り痕の方は口縁部でやや外反し、先端が細くなるものが多く、底部が広く安定している。32は備前焼擂鉢で、15世紀中頃と思われる。33は瓦質の風炉で15世紀と思われる。外面にヘラ状の工具で縦方向に連続刺突される。輸入陶磁器類は14世紀の白磁碗や15世紀代の青磁碗が流れ込みのような状態で上層を中心に出土している。

７号溝（６図・付図１）

調査区西側に位置するＬ字状の溝である。この溝が検出されたところは後世の削平を受けてか基本層序のＶ層（縄文早期包含層）面であった。Ｄ13グリットから南西側に延び調査区の境で南東方向にＤ15グリットまで延びる。溝の幅は約1.0～1.5ｍである。溝の床面は平坦で、溝が屈折するあたりで平坦なテラス状の段を有する以外は床面から直接壁面が立ち上がる。

出土遺物は肥前系の陶器が数点出土している。16は小杯の底部で底部外面は施釉がない。17世紀前後（1,590年～1,630年）である。17は唐津の皿で畳付より内側は施釉しない。17世紀前後（1,580年～1,610年）である。18は碗である。17世紀前後である。

遺構の切り合い関係から５号建物よりは新しいことが確認されており、出土遺物の年代から17世紀前後の遺構であろうと思われる。

８号溝（付図１）

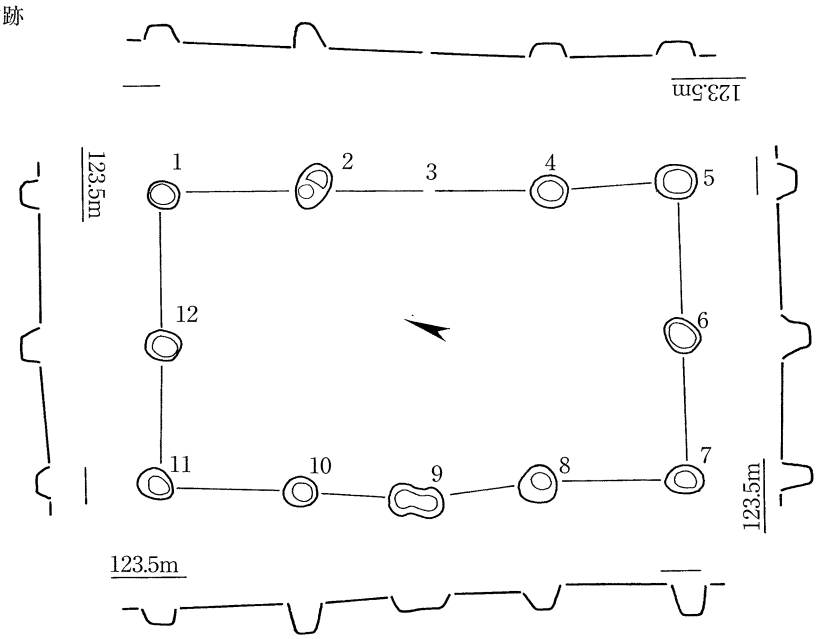
Ｇ10グリットに存在する。長さ約９ｍ、最大幅約２ｍ、南東側が幅広く北西側が狭くなる形状の溝状遺構である。非常に浅く、遺物は出土していない。

３　掘立柱建物跡

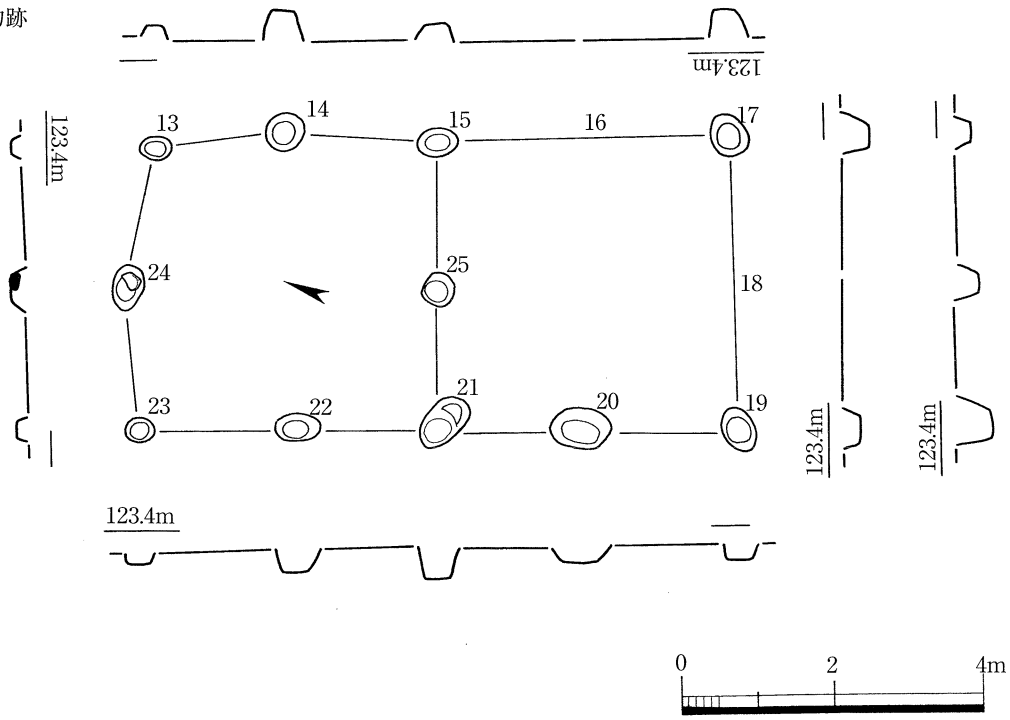
１号建物跡（10図）

調査区北側に位置する２間×４間、桁行軸Ｎ－20°－Ｗの方向に建つ掘立柱建物である。桁行はＰ１～Ｐ５が約6.86ｍでＰ７～Ｐ11が約6.94ｍあり、柱心間平均1.76ｍである。梁行はＰ１～Ｐ11が約3.88ｍでＰ５～Ｐ７が約4.0ｍあり、柱心間平均1.925ｍである。柱穴はＰ２とＰ４の間にＰ９に対応するＰ３が確認されていない。また、この建物に重なるようにして３号と４号建物跡が確認されているが新旧関係は

1号建物跡



2号建物跡

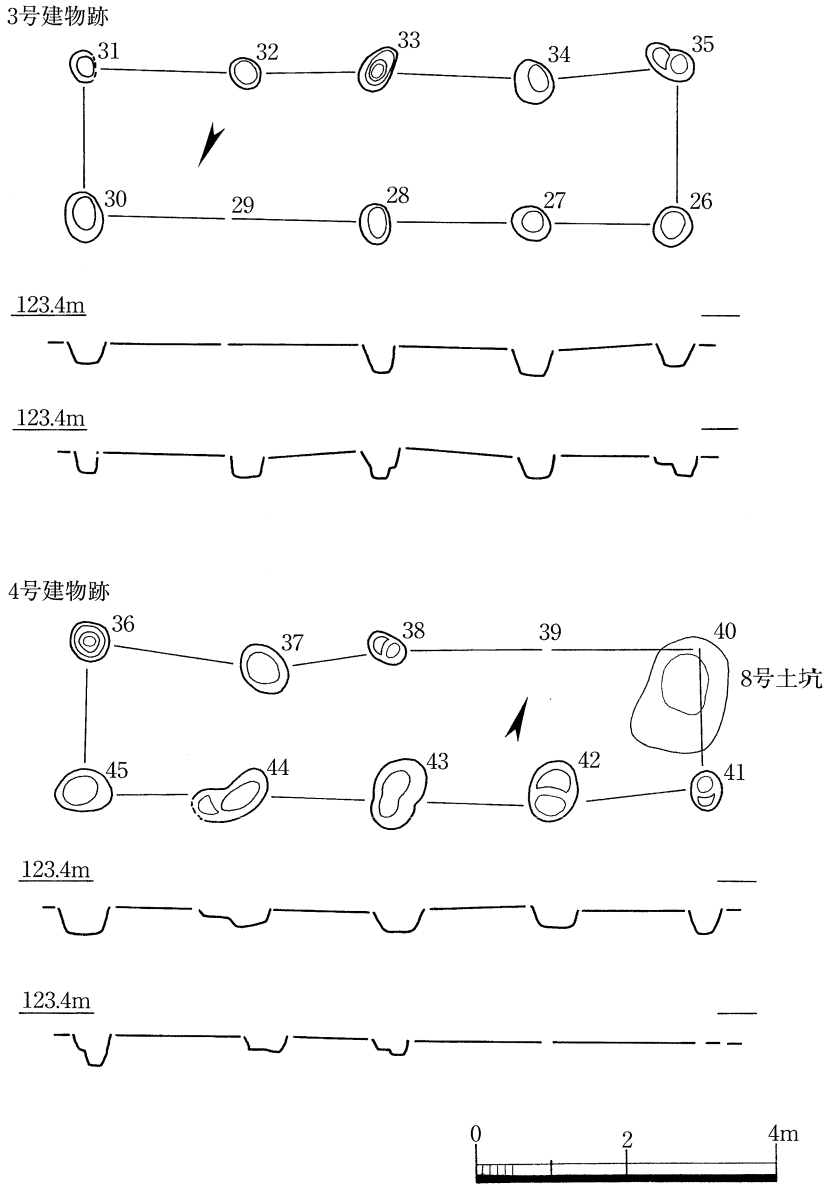


第10図　掘立柱建物跡実測図(1)

わからない。

2号建物跡（10図）

調査区北側で1号住居の西側に位置する。桁行軸N−21°−Wの方向に2間×4間の堀立柱建物である。桁行P13〜P17が約7.6mでP19〜P23が約7.94mあり、柱心間平均1.938mである。P13とP14の間が他と比較すると柱穴1個分ほど短くなっている。また、P15とP17の間にP20に対応するP16が確認されていない。梁行はP13〜P23が3.76mでP17〜P19が3.96mで、さらに建物の中央にP25を設けP15〜P21が3.86mで、柱心間平均1.925mである。P13とP23を直線で結ぶとP24を通らず、P24に根石があることからそこを通すとP13はやや北側にあった方が都合がよい。また、P17とP19の間にはP24に対応するP18が確認されていない。



第11図　掘立柱建物跡実測図(2)

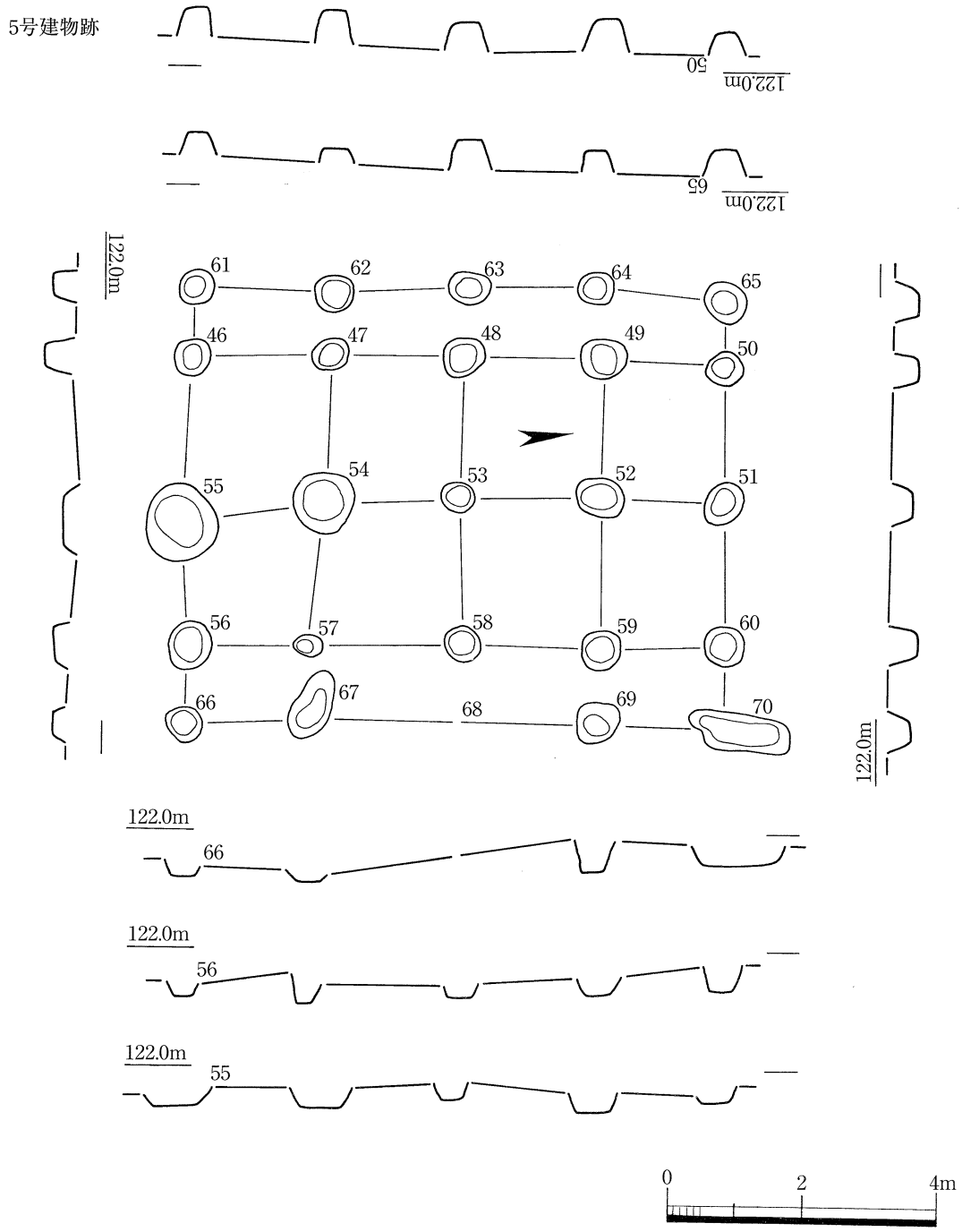
3号建物跡（11図）

調査区の北側に位置し、1号建物に対し直角方向に重なって存在する。規模は1間×4間で桁行軸がN−68°−Eの方向に存在する。P26〜P30が7.82mでP31〜P35は7.64mあり柱心間平均1.95mである。梁行は柱心間平均1.988mである。桁行P28とP30の間のP32に対応するP29は確認されていない。

4号建物跡（11図）

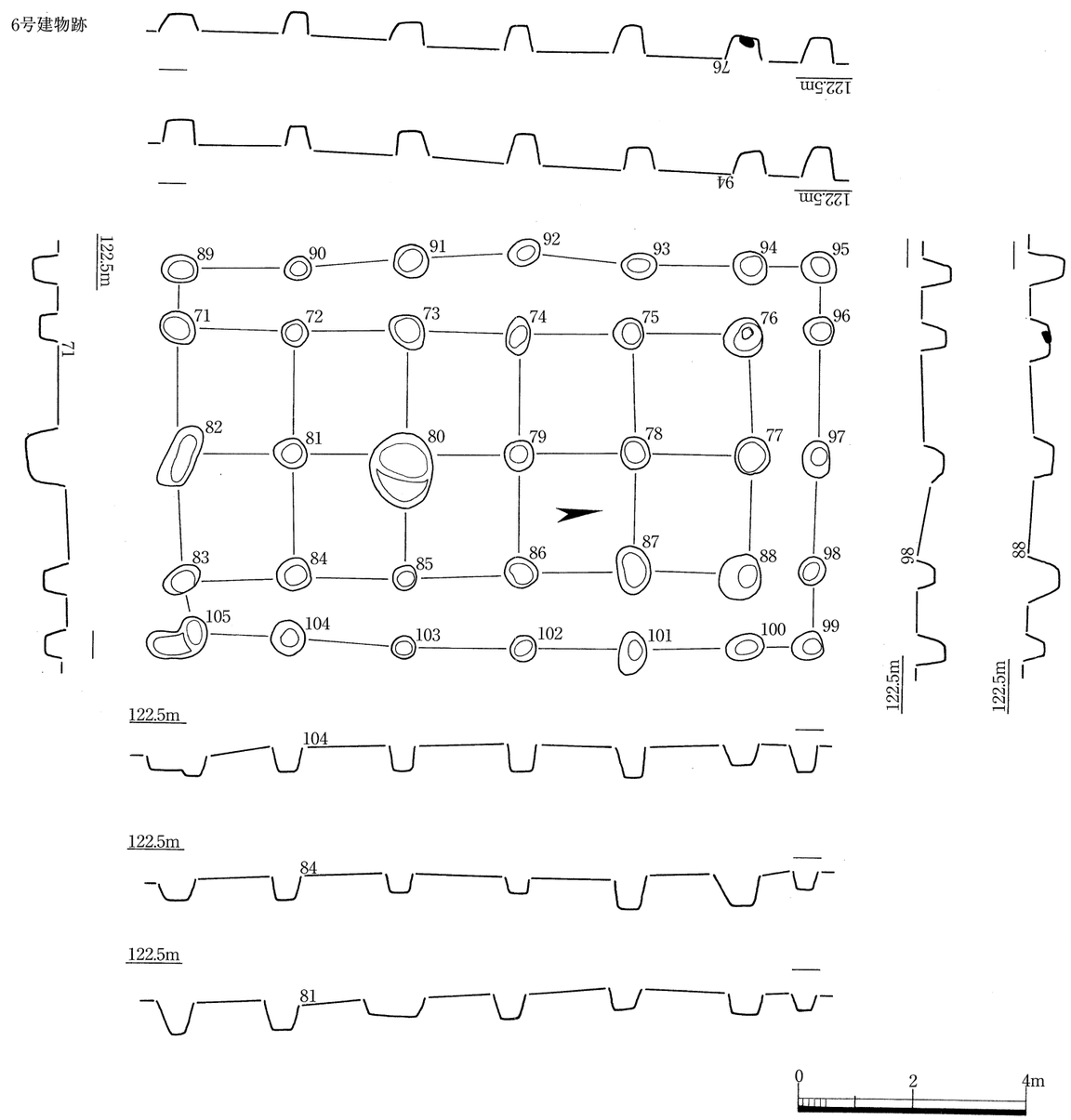
3号建物の南側にほぼ並行して存在する。規模も方向も3号建物と同じである。桁行はP36〜P40で約8.0m、P41〜P45で8.28mあり柱心間平均2.013mである。ただし、P40は8号土坑により破壊されており正確な数値ではない。また、梁行のP36とP45が2.0mであるためそれを梁行P40とP41に当てはめると桁行P37とP38はやや内側に入り込んだところにあり直線上には列ばない。さらに梁行P38とP42は互いにP41とP45を結ぶ線に対して直角には対応せず大きく東側にずれる。また、P42に対応するP39は確認されていないため、このような規模に対してはやや不安が残るものの少なくともこれに近い形の建物は存在したものと思われる。

5号建物跡（12図）

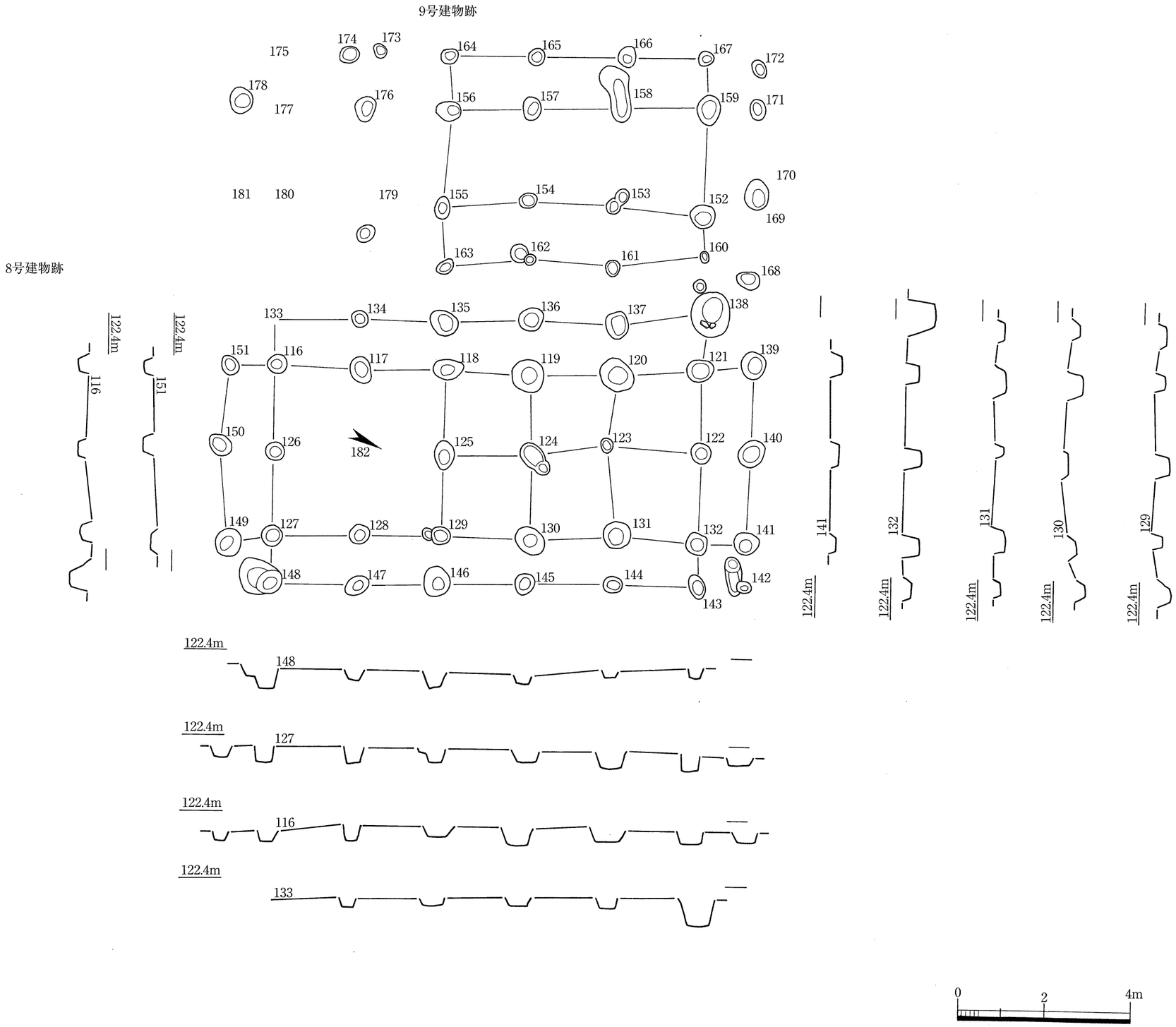


第12図　掘立柱建物跡実測図(3)

調査区の西側に位置する。6号溝の内側で6号建物跡の南側にあり、さらに7号溝によって柱穴が削平された状態で検出された。規模は2間×4間の総柱建物で東西の2面に庇を設けており、桁行軸がN－85°－Wでほぼ南北方向である。桁行はP46～P50が7.92mで、P51～P55が8.06mで、P56～P60が7.98mあり、柱心間平均1.988mである。梁行はP46～P56が4.26mでP50～P60が4.14mあり、柱心間平均2.115mである。庇部分は桁行P61～P65が7.88mでP66～P70が8.0m前後である。梁行は柱心間平均1.086mで、母屋部分の梁行から比較すると約半分の長さ（半間）である。桁行P51～P55はP55でやや東に柱穴がずれるが柱穴の規模が大きく床面は直線上に入る。P57，P58，P67は攪乱坑により大きく削平され残深わずかであり、庇部分のP68は確認されなかった。また、P50、P51、P52、P



第13図　掘立柱建物跡実測図(4)



第14図　掘立柱建物跡実測図(5)

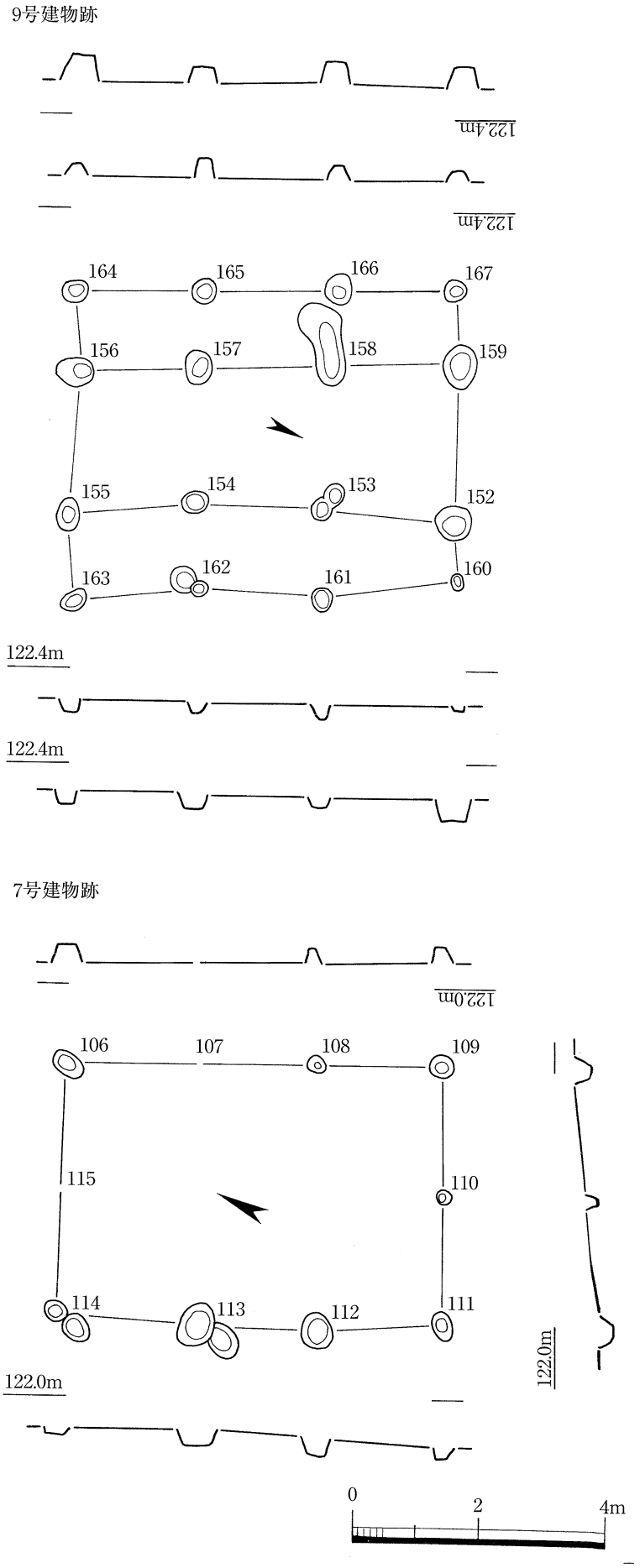
59は７号溝の削平を受けていた。これにより７号溝よりも古いことが明らかである。

６号建物跡（13図）

６号溝の内側で５号建物跡の北側にある。規模は２間×５間の総柱建物で、東、西、北の３面に庇を設けている。桁行軸はＰ71～Ｐ76が10.08ｍで、Ｐ77～Ｐ82が10.04ｍで、Ｐ83～Ｐ88が10.02ｍである。桁行軸の柱心間平均は2.10ｍである。梁行はＰ71～Ｐ83が4.50ｍでＰ76～Ｐ88が4.28ｍであり、梁行軸の柱心間平均は2.13ｍであった。庇部分は、桁行軸の柱心間平均1.17ｍ、梁行軸の柱心間平均1.305ｍである。桁行軸の方向は５号建物とほぼ同じであり双方の桁行軸が直線に列ぶことから、調査時は主殿と客殿を想定した一連の建物跡と推定された。しかしながら、５号建物と６号建物の離れている距離が互いの桁行の柱心間距離よりも短く庇の柱心間距離よりも長い。さらに直線上に列ぶとみられる桁行軸が建物の中心軸と庇軸であり不自然であることから別棟の建物であろうと判断した。柱穴の規模は比較的大きなものが建物中央部にあるが平均して径0.5～0.6ｍのものが多い。庇部分の柱穴は母屋のものと同規模であることから、回廊のような施設であったものと推定する。

７号建物跡（15図）

Ｅ15・Ｆ15グリットに位置する。規模は２間×３間で、方向は桁行軸Ｎ－26°－Ｗである。桁行Ｐ106～Ｐ109が5.9ｍでＰ111～Ｐ114が6.1ｍで桁行柱心間平均1.933ｍである。梁行Ｐ106～Ｐ114が3.92ｍでＰ109～Ｐ111が4.08ｍで梁行柱心間2.035ｍである。Ｐ110、Ｐ111、Ｐ108は



第15図　掘立柱建物跡実測図(6)

6号溝の埋没後に設けられており7号建物は6号建物よりは新しい。桁行軸P106とP108の間のP113に対応するP107は確認されなかった。また、梁行軸P106とP114の間のP110に対応するP115も確認されていない。柱穴の規模は径0.4m前後のものが多く他の建物跡と比較するとやや小規模である。

8号建物跡（14図）

調査区の南側に位置する。この建物跡の西側に9号建物跡があり、その周辺のピットも含めると直線的に列ぶものが多い。そのため、この二つの建物以外でも別の建物の存在が推定されるが、確実性の高いものだけを対象に遺構番号を附した。まず、8号建物としたものであるが、規模は2×5間で4面庇を設け、方向は桁行軸N－27°－Wである。桁行P116～P121は9.96mでP127～P132は9.96mで柱心間平均1.965mである。梁行P116～P127は4.02mでP4.06mで柱心間平均1.98mである。庇部分は桁行の柱心間平均が1.175mで梁行の柱心間平均が1.164mである。この4面の庇は、P141とP143の延長線上にあるP142も位置関係から柱穴の一部かと思われたが他の3隅は柱穴が伴っていないため、ここだけ回廊状に繋がるとは考えられない。また、P134から南側に延長したところのP133は確認されていないが建物のバランスを考えるとP133は存在したものと考えたほうがよい。母屋については、桁行P122～P126はP125と126の間にP182は確認されていないため、この建物跡を総柱として図示していないが、総柱の可能性は十分にある。

先に触れた他の建物の存在であるが、そのいくつかを仮定してみよう。まず、8号建物跡を主体として母屋がP177とP159とP132とP127を四隅とした5×5間で4面庇の建物（8号建物跡の西面庇は考えない）である。庇はP142とP172を活かし桁行がP148とP175までそれぞれ延びる。南面の庇はP149～P178で考える。この場合、桁行のP133～P138より南側において、P168～P170、P152、P160、P183に対する桁行軸に関しては直線上の列びが不安定であること、そして梁行P175～P116とP151～P178では柱穴がP178しか存在せずこの規模で建物を考えるには無理がある。そのため梁行P117～176（西面庇の柱穴は本来ならP173とP174の間に必要）もしくは梁行P118～164より南側を除いて鍵状の建物を考えてみたが先に述べたように桁行の直線上の並びが不安定である。次にP152とP159の柱心距離を基準に考えてみた場合、P159とP183とP135（P134）とP156（P176）の四隅からなる建物が考

表1　掘立柱建物跡計測表

建物No.	規模（間）	庇面	桁行（m）		梁行（m）		庇（m）		桁行軸方位	備考
			全長	平均柱心間長	全長	平均柱心間長	桁行側	梁行側		
1	2×4	—	6.9	1.76	3.94	1.925	—	—	N－20°－W	
2	2×4	—	7.77	1.938	3.86	1.925	—	—	N－21°－W	
3	1×4	—	7.73	1.95	—	1.988	—	—	N－68°－E	
4	1×4	—	8.14	2.013	—	1.885	—	—	N－68°－E	
5	2×4	2	7.98	1.995	4.20	2.115	—	1.086	N－85°－W	総柱
6	2×5	3	10.048	2.10	4.30	2.130	1.170	1.305	N－85°－W	総柱
7	2×3	—	6.00	1.933	4.0	2.035	—	—	N－26°－W	
8	2×5	4	9.60	1.965	3.906	1.960	1.175	1.164	N－27°－W	総柱？
9	1×3	2	6.06	2.013	—	2.313	—	1.25	N－27°－W	

えられる。この場合桁行P134～P138が二つの建物で共有されることになる。台風などの建物倒壊により同じ柱穴を利用して改築もしくは再建されたと解釈した場合、当然柱穴断面から柱の立て替えの痕跡が確認できるはずであるがそのような痕跡はみられない。また、この建物と8号建物がP117（P116）とP121とP138とP134（P133）を四隅とする庇部分で繋がる一つの建物と仮定すると柱穴断面に柱の建て替えの痕跡がないことは説明がつくが、梁行柱心間の距離がP159～P138側とP121とP132側とでは全く異なり、同じ建物内ではそのようなことはあまり考えられないのではなかろうか。

このようなことから、存在した可能性が高い建物は検出された遺構からは8号建物跡や9号建物跡ということになる。

9号建物跡（15図）

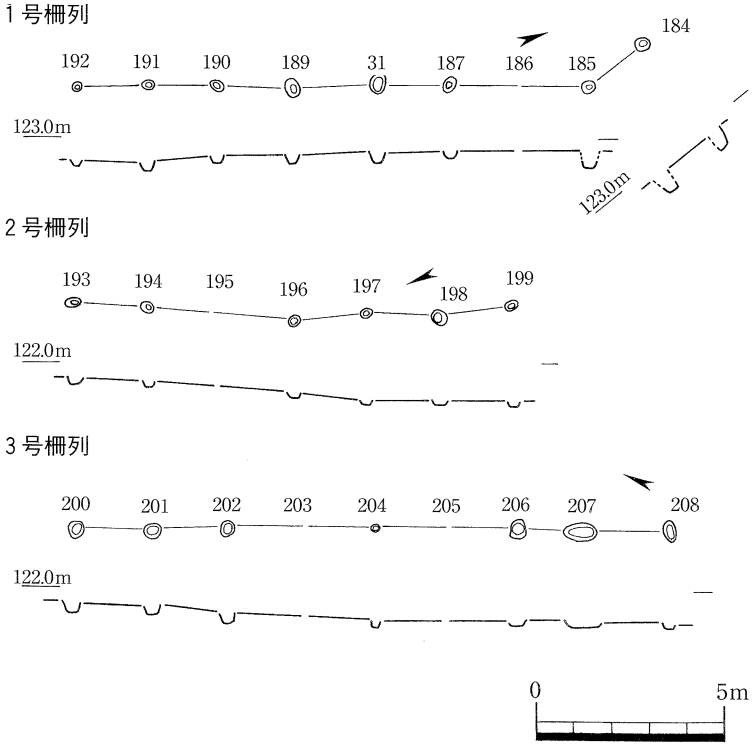
7号建物の東側に位置する。1×3間の東西2面庇で建物の方位はN－26°－Wである。桁行P152～P155は6.12mでP156～P159は6.0mで柱心間平均2.015mである。梁行2.313mである。庇部分は1.25mである。東面の庇はP160は非常に浅く深さ5cm足らずである。庇自体はP163に至って広がる感がある。P158の変形したプランは柱の倒壊によるものと思われる。

4　柵　　列

1号柵列（16図）

F13・14グリットの6号溝西側にあり、その溝に沿って柱穴が列ぶ。P184とP185は溝が屈折する部分にあたり、その柱穴間にもう一つ柱穴がありそれも伴うかもしれない。P185～P192は7間で13.4mを計り、柱心間平均1.914mである。P186は確認されていない。6号溝で囲まれたところを防御するためのものであろうと考えられる。

2号柵列（16図）

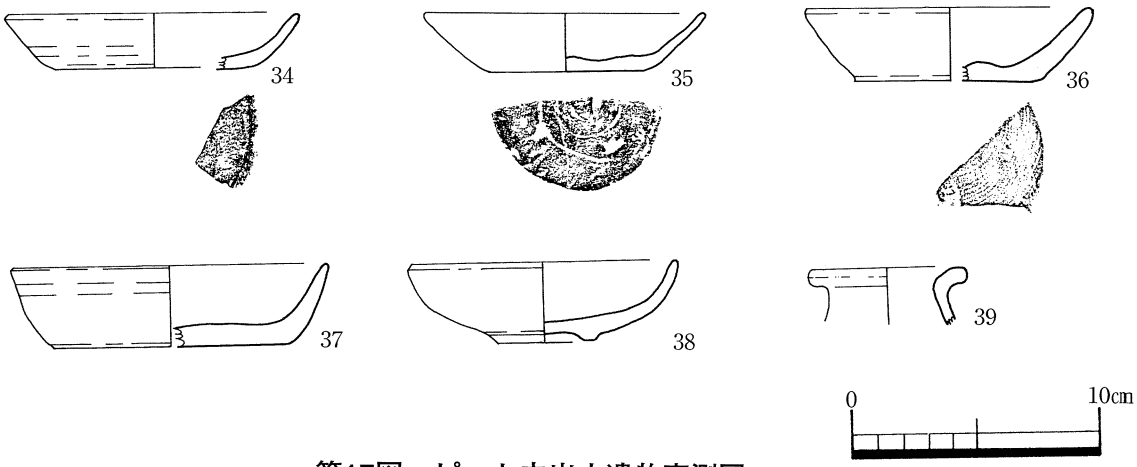


第16図　柵列跡実測図

E15・16グリットの6号溝西側にあり、1号柵列と一連のものと思われるが、P192とP193の間にはそれに伴うような柱穴は確認されていない。P193～P199は6間で11.4mを計り、柱心間平均1.9mである。P195は確認されていない。

3号柵列（16図）

7号建物跡の西側を建物に並行するように存在する。P200～P208は8間で15.6mを計り、柱心間平均1.95mである。P203とP204は確認されていない。時期的には6号溝が埋没した後にP205が設けられており、7号建物との位置関係からこの建物と一連の施設と考えられ、用途も防御的意味合いもあろうが、区画を示すためのものとも考えられる。



第17図　ピット内出土遺物実測図

ピット状の遺構からは、土師器の杯、小皿、輸入陶磁器や国産陶器類が出土している。特に、１号から４号建物が位置するあたりは17世紀前後の遺物が出土し、５号建物跡～９号建物跡が位置するところは17世紀前後の遺物の他に14世紀～16世紀の遺物もみられる。

34～39はピット状遺構からの出土遺物である。34から36は土師器皿で34と35は底部切り離しが回転利用のヘラ切り痕である。34は１号建物跡のＰ12から出土し、35は８号建物跡の南側ピット（Ｐ209）で出土し、36は６号建物跡のＰ９７で出土した。３７は土師器杯で回転利用の糸切り痕で、１号土坑の東側ピット（Ｐ210）で出土した。38は唐津系の皿で２号建物跡のＰ21で出土した。17世紀前後のものと思われ

表２　出土土器観察表

遺物番号	挿図	図版	出土地点	器種	法量			調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	5	12	1号土坑	杯（土師器）	12.8cm	5.6cm	4.7cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色（Hue7.5YR8/6）	浅黄橙色（Hue10YR8/4）	1㎜弱の白色粒　少 1㎜弱の灰色粒　少	
2	5	12	1号土坑	甕（土師器）	18.2cm	—	—	②回転利用のナデ	②回転利用のナデ ③下から上方向へのヘラケズリ	淡赤橙色（Hue2.5YR7/4）	浅黄橙色（Hue10YR8/3）	1～5㎜の大砂粒　多	
3	5	13	3号土坑	碗（鉄絵）	—	4.3cm	—	④施釉なし	③施釉 ④施釉	Hue5YR 灰褐6/2	Hue2.5GY オリーブ灰 6/1	Hue IOY 灰色7/1 精良	唐津系
4	8	—	1号溝37層	小皿（土師器）	7.0cm	5.2cm	1.8cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	浅黄色（Hue10YR8/3）	にぶい黄橙（Hue10YR7/3）	茶色粒	
5	8	—	1号溝37層	小皿（土師器）	8.0cm	5.6cm	1.6cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色（Hue10YR8/3）	浅黄橙色（Hue10YR8/3）	茶色粒	
6	8	—	1号溝31層	小皿（土師器）	9.0cm	7.6cm	2.0cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色（Hue7.5 8/4）	浅黄橙色（Hue7.5 8/4）	1㎜大の茶色粒	
7	8	—	1号溝31層	皿（土師器）	10.8cm	7.2cm	2.8cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	1㎜の茶色粒少	

遺物番号	挿図	図版	出土地点	器種	法量			調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
8	8	—	1号溝37層	杯(土師器)	12.0cm	6.2cm	3.65cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	明褐灰色(7.5YR7/2)	明褐灰色(7.5YR7/2)	茶色粒少	
9	8	—	1号溝31層	杯(土師器)	14.0cm	7.2cm	4.0cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色(7.5YR8/4)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	1㎜弱の黒色粒　少	
10	8	—	1号溝37層	杯(土師器)	14.4cm	8.6cm	3.95cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	淡黄色(Hue2.5Y8/3)	淡黄色(Hue2.5Y8/4)	1㎜の茶色粒	
11	8	12	1号溝31層	杯(土師器)	13.0cm	8.0cm	3.1cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	灰白色(Hue10 8/1)	灰白色(Hue10 8/1)	1㎜弱の黒色粒	
12	8	—	2号溝	鉢(土師質)	—	—	—	②ナデ	②ナデ	Hue 5 Y灰白 8/2	Hue7.5Y灰白 7/1	1㎜以下の光沢粒 1㎜以下の茶色粒 1㎜以下の灰色粒	
13	8	—	4号溝	袋物(陶器)	—	—	—	③回転利用のナデ ④不明	③回転利用のナデ	Hue7.5YR にぶい橙6/4	Hue7.5Y R にぶい橙6/4	精良	
14	8	—	4号溝	皿(陶器)	—	5.2cm	—	③施釉 ④釉なし	③施釉	Hue 5 Y灰白 7/2	Hue 5 Y灰6/1	1㎜弱の黒色粒　少	唐津系
15	8	—	4号溝	擂鉢(土師質)	—	—	—	①ナデ ③斜方向のナデ	②ヨコ方向のナデ ③ヨコ方向のナデ後、斜方向5本ハケ目	Hue10YR にぶい黄橙 7/3	Hue IOYR にぶい黄橙 7/4	1㎜以下の黒色粒　多 1㎜以下の乳白色半透明粒　少	
16	8	—	7号溝	小杯(陶器)	—	5.3cm	—	③施釉 ④施釉なし	③施釉 ④施釉	Hue2.5GY オリーブ灰 6/1	Hue 5 GY オリーブ灰 6/1	1㎜弱の黒色粒　少	肥前系
17	8	—	7号溝	皿(陶器)	—	5.25cm	—	③施釉 ④釉なし	③施釉 ④施釉	Hue 5 Y灰白 7/1	Hue 5 Y灰白 7/1	1㎜弱の黒色粒　少	
18	8	—	7号溝	皿(陶器)	—	—	—	③施釉	③施釉	Hue 5 Y灰6/1	Hue 5 Y灰6/1	1㎜弱の黒色粒　少	唐津系
19	8	—	3号溝	杯(土師器)	—	8.2cm	—	③回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	④回転利用のナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR にぶい橙7/4	1㎜～3㎜の茶色粒　多 1㎜前後の灰色粒　多	
20	8	13	3号溝	皿(陶器)	—	5.55cm	—	③施釉 ④施釉なし	④施釉	Hue2.5GY オリーブ灰 6/1	Hue2.5GY オリーブ灰 6/1	1㎜弱の黒色粒　少	唐津系 鉄絵
21	8	—	3号溝	碗(陶器)	—	—	—	③施釉	③施釉	Hue2.5Y 黄灰4/1	Hue2.5Y 暗灰黄4/2	1㎜弱の黒色粒　極少	
22	9	12	6号溝15・16層	小皿(土師器)	8.0cm	6.6cm	1.3cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/3	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/3	1㎜弱の茶色粒　少	
23	9	—	6号溝15・16層	杯(土師器)	—	7.7cm	—	③回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	③回転利用のナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/3	浅黄橙色 Hue10YR 8/3	1㎜～2㎜大の茶色粒　少	

遺物番号	挿図	図版	出土地点	器種	法量			調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
24	9	12	6号溝15・16層	杯(土師器)	13.8cm	7.8cm	4.2cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	③回転利用のナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	1㎜以内の茶色粒 少 極小の黒色粒	
25	9	12	6号溝15・16層	杯(土師器)	12.9cm	7.5cm	4cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	橙色 Hue7.5YR 7/6	橙色 Hue7.5YR 7/6	1㎜大の黒色粒 少	
26	9	—	6号溝15・16層	杯(土師器)	—	8.7cm	—	③回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	③回転利用のナデ	淡橙色 Hue5YR 8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	1㎜大の茶色粒	
27	9	—	6号溝15・16層	杯(土師器)	12.7cm	9.5cm	3.7cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR 5/4	にぶい橙色 Hue7.5YR 6/4	1㎜大の黒色粒 少 1㎜大の茶色粒 少	
28	9	12	6号溝15・16層	杯(土師器)	15cm	10.1cm	3.4cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	橙色 Hue7.5YR 6/6	橙色 Hue7.5YR 6/6	1㎜弱の黒色粒 少	
29	9	12	6号溝15・16層	杯(土師器)	12.6cm	4.6cm	3.0cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用の糸切り痕	浅黄橙 Hue7.5YR 8/4	浅黄橙 Hue10YR 8/4	1㎜大の茶色粒	
30	9	—	6号溝15・16層	杯(土師器)	13.4cm	9.8cm	3.4cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色 Hue10YR 8/4	浅黄橙色	1㎜大の茶色粒	
31	9	—	6号溝15・16層	杯(土師器)	15.2cm	10.2cm	3.05cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	1㎜大の茶色粒	
32	9	12	6号溝7・8層	擂鉢(陶器)	29.4cm	16.2cm	10.6cm	②回転利用のナデ ④ナデ	③回転利用のナデ後9本ハケ目	灰赤色 Hue2.5YR 5/2	灰色 Hue5Y 4/1	2㎜大の白色粒 多	備前系
33	9	13	6号溝7・8層	風炉(瓦質)	—	—	—	②ヘラ状工具による連続刺突	②回転利用のナデ	褐灰 Hue10YR 6/1	黒色 Hue10YR 2/1	1～4㎜大の小砂粒 少	
34	17	—	P12	皿(土師器)	11.6cm	7.8cm	2.3cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR 7/4	極小の黒色粒 多 極小の茶色粒 少	
35	17	12	P209	皿(土師器)	11.2cm	6.8cm	2.4cm	②回転利用のナデ ④回転利用のヘラ切り痕	②回転利用のナデ	にぶい橙色 Hue5YR 7/4	にぶい橙色 Hue 5 YR 7/4	1㎜弱の黒色粒 少	
36	17	—	P97	皿(土師器)	11.2cm	7.45cm	2.9cm	②回転利用のナデ ④回転利用の糸切り痕	②回転利用のナデ	浅黄橙 Hue7.5YR 8/4	浅黄橙 Hue7.5YR 8/4	1㎜位の黒色粒 1個 極小の光沢粒 多 1～2㎜位の茶褐色粒 少	
37	17	—	P210	杯(土師器)	12.4cm	9.7cm	3.2cm	②回転利用のナデ ④板状圧痕あり	②回転利用のナデ	浅黄橙 Hue10YR 8/3	浅黄橙 Hue10YR 8/3	極小の灰色粒 多	
38	17	—	P21	皿(陶器)	10.45cm	3.9cm	3.2cm	②施釉 ④施釉なし	②施釉	灰オリーブ Hue7.5Y 5/2	灰オリーブ Hue7.5Y 5/3	1㎜弱の黒色粒 少	唐津系
39	17	13	P132	壺(陶器)	5.7cm	—	—	②施釉	②施釉	暗オリーブ Hue5Y 4/3	にぶい赤褐 Hue5YR 5/3	1㎜弱の黒色粒 少	唐津系

Ⅱ　高岡の歴史と天ケ城

第１節　天ケ城築城以前の高岡

１．久　津　良

久津良と高岡　　現在の「高岡」という地名が呼ばれるようになったのは、慶長５年（1600）、島津義弘が関ヶ原の戦いから帰国後、「関外之本ト城」として（去川の関所より外にある高岡・穆佐・綾・倉岡の四ケ郷を「関外四ケ郷」、それより内側を「内場」「関内」などと呼んでいた）、新たに高岡郷を創設してからのことで、それ以前は内山・飯田・八代の三ケ郷からなり、特に現在の高岡麓のあたりは「久津良」と呼ばれていた。『高岡郷土史』（杉尾勝三氏著、昭和７年刊）によれば、「久津良名」は、源平の時代に「久津良太郎国光」なる人物がこの地を開発して領していたことにその端を発し、久津良６町の村号であるとしている。名とは、古代から中世にかけて、荘園・国衙領の内部を構成した徴税の基本単位であり、その名（田）には、ふつう人名が冠されていた。この久津良名においても開発領主であった久津良太郎国光の「久津良」がその名に冠され、「久津良名」として変質していったものと考えられる。

現在、高岡町大字内山の大手迫地区にある内山神社には、この「久津良太郎国光」を祭神とする久津良大明神が合祀されている。この久津良大明神は、もとは川端天満宮（現在の大字五町川端の八坂神社）の社殿に祀られていたのが、天保９年（1838）に客屋構内（旧高岡町役場跡、現在の宮崎営林署高岡森林技術センター）に移され、さらに明治３年（1870）に現在の内山神社に合祀されている（前掲『高岡郷土史』）。この久津良大明神が、移転を繰り返しはしているものの、当時における「久津良名」の存在をうかがわせる唯一の遺跡といえる。

久津良と伊東氏庶流門川氏　　江戸時代に編纂された様々な記録類には、久津良に関する記事がしばしば登場する。『高岡名勝志』もその一つで、その文中には、久津良は、「高岡麓の辺、惣名を往古は久津良と申候、応永年鑑（間）、久豊公穆佐御在城の砌、元久公と御不和にて御座遊され、御合戦の節、毎度御取合御座候所と申伝られ候」とある。島津元久は、明徳２年（1391）に日向国守護職に補任されると、日向国に積極的に進出し、応永10年（1403）には、海江田城・穆佐城を中心とする河南（大淀川以南）の地を知行した。同年、元久は穆佐城の守りを弟久豊に命じると、久豊は池尻・白糸・細江に城を築き、河南の守りを固めた。ところが、久豊が元久に無断で伊東祐安の娘を娶ると、両者の間は次第に険悪なものになっていった（『旧記雑録前編』二－六四〇）。その後、細江城に拠って久豊に謀反した後藤氏を久豊が攻めたのをきっかけに、日向国は大いに乱れ、「山東河北宮崎田島木脇河南土持県岡富財部等」の衆はことごとく久豊に背き、元久の東征を請い、元久はすぐ日向国に趣き、宮崎・田島を巡り、穂北の大河を渡り、峰に陣を置いた。久豊も伊東祐安とともに大軍を率い、「本庄深利飯田クツラ池尻白糸細江数里の間」に陣を置いた（『西藩野史』）。

ところで、「南家伊東氏藤原姓大系図」（『宮崎県史』通史編中世　図４－８）によれば、伊東氏庶流門川氏の祐能代に「日向国清武・石塚・久津良地頭」とあり、その子である祐行が清武（現清武町、清武氏）、祐武が石塚（現宮崎市大字浮田、石塚氏）、祐興が久津良（平賀氏）にそれぞれ拠点を置いていた。また、「壱岐伊賀自記」（都城島津家文書）によると、祐能は、嘉慶元年（1387）に平賀に没してい

る。平賀とは、現在の高岡町大字五町横岩のあたりで、『高岡名勝志』では、平賀城は「地頭仮屋（現在の高岡小学校付近）より未申（南西）之方　道法五町程」で、嘉慶元年には伊東祐能が居城、後の永享5年（1433）に落城とある。また、飯田城について、同じく嘉慶元年には「伊東肥州（肥後守祐武のこと）取建」の城とあり、この時期には、久津良・飯田のあたりが、祐能・祐武など門川氏の支配下にあったことがうかがえる。惣領家伊東祐安の母である豊夜叉御前が門川氏の泰祐（「伊東氏大系図」には康祐とあり、祐能の曾祖父）であることから、恐らく、前述した、応永10年における島津元久と久豊の対陣においても、久津良・飯田の地は門川氏の支配下にあり、久豊・祐安方として守護元久と対陣したものと考えられる。

久津良をめぐる一五世紀の情勢　以上、一四世紀末から15世紀前半にかけて、伊東氏庶流の門川氏が久津良・飯田の地に拠点を置き、その支配下におさめていたことが想定される。その中で、『高岡名勝志』には、永享5年に「落城」とある。史料によりこの事件について特定することはできないが、この時期には、久津良・飯田を中心として、めまぐるしい情勢の変化を見ることができる。

永享4年（1432）6月、島津勢は都於郡（現西都市）と六野原（現国富町）の間に進出したが、利なくして内山に退いている。さらに、同年7月14日、河骨で島津方と伊東方が合戦（河骨合戦）、島津勢は敗北し、伊東氏は飯田・平賀を知行し、落合七郎左衛門尉を配置した（「犬追物並祐安逝去事」『日向記』）。河骨は、現在の高岡町大字飯田川舟に比定される。この時の合戦で死者が多く、飯田川を死者が埋め尽くしたということから河骨の地名が起こり、現在は川舟と訛ったという（前掲『高岡郷土史』）。

また、永享6年9月8日、島津勢は再び大軍を催し、木脇（現国富町）へ出陣、伊東・土持軍と木脇劫生寺前で合戦（桑津留合戦）、10月18日には島津勢が帰陣、双方和睦し、11月30日には飯田が島津領となった（「祐立疣河落水事」『日向記』）。

ところで、これより前の応永8年（1401）には、祐武が石塚に入城し、同12年に石塚を知行、同25年には海江田城に移り、細江を知行するなど、次第にその拠点を石塚・細江・海江田の河南（大淀川以南）の地に移している。この両年の島津氏と伊東氏の攻防により、久津良、飯田の地がそれまで拠点を置いていた伊東氏庶流門川氏の手から伊東惣領家や島津家の手に移っていったと考えられる。永享5年の平賀城「落城」の言い伝えもこのような時期の島津・伊東両家の攻防の間で平賀城が戦場となったことによるものであろう。

「日向国五郡分帳」と久津良　以上、久津良に関する江戸時代の諸記録類から、14世紀末から15世紀にかけての情勢を見てきたわけであるが、中世に作成された久津良の文書は非常に少ない。よって、その実態を知ることは非常に難しいのであるが、その中で「日向国五郡分帳」（『日向郷土史料集　第5巻』）に久津良の地名を見ることができる。「日向国五郡分帳」は、天正16年（1588）、豊臣秀吉から日向国の諸大名に知行目録が発布されたが、その知行割の判断根拠となった史料と言われている（「日向国五郡分帳」の作成年代か天正19年となっているなど、日付の問題については『宮崎県史　通史編中世』第5章第5節を参照）。帳簿作成者の綾新右衛門尉は、伊東氏譜代の被官で、島津氏などから提出された各種の『日向国図田帳』や古くからの記録を参照し、石田三成らが日向国の知行割を完成する上で、これら資料の調査や収集を媒介するなど、重要な役割を果たした。

この「日向国五郡分帳」の「宮崎之郡」の項に、「久津良　六町」と見える。他に同郡の項に「小山田一六町」「高浜六町」「倉永八〇町」「飯田一二町」「同五町」、「諸県郡」の項に「浦之名一二町」など、

「内山」の部分を除くと、現在の高岡町域の田積がほぼ記されている。

ところで、天正16年に豊臣秀吉から島津義弘に宛われた知行目録には、「穆佐之院二五三町」「うらの名一二町」「い井田一七町」と見え、このうち浦之名、飯田は「日向国五郡分帳」と合致している（島津家文書「豊臣秀吉知行目録」）。また、「穆佐之院二五三町」は、建久８年（1197）の「日向国図田帳写（島津家文書）」に見える「穆佐院三百丁」のうち、同じ天正16年、高橋元種に宛われている「富吉三五町」（高橋文書「豊臣秀吉朱印状」）を除き、「富吉八〇町」と先の「久津良」「小山田」「高浜」「倉永」と、「日向国五郡分帳」に記されていない「内山」を加えてたものと想定できる。とすれば、天正16年には、久津良の地は、穆佐院の一部として、島津義弘に宛われたことがわかる。

河上文書に見る久津良　河上文書に残る慶長11年（1606）の「知行名寄」（『宮崎県史』史料編中世１）にも「久津良」の名称が見える。河上氏は、慶長５年（1600）の高岡郷創設の際に、高岡郷に召移された家で、それ以前は、薩摩国市来院郡司市来氏の庶流で、その名は本領市来院河上名（現鹿児島県市来町）に由来する。高岡に移って後は、当初、持高20石余で（松岡家文書「高岡郷被召立候節所々より移来人数」『宮崎県史』史料編近世５）、文政13年（1830）には200石余となっている。

この「知行名寄」は、慶長11年１月19日に、高岡御支配所から川上二郎左衛門尉（忠宅）に、「衆中屋しき成返代」として、「久津良村浮免」のうち「吹上　中田一反四せ九歩」が宛われている。現在では「吹上」なる地名は見あたらないが、「久津良」が慶長11年当時まで、「村」として把握されていたことがわかる。

ところで、同文書の慶長６年の「加増名寄帳」（『宮崎県史』史料編近世５）にも河上氏の知行地として、「五町村」の内に「さるまへ」「辻のまへ」「尾谷」の地名が見える。その中で「辻の前」は現在は大字飯田（旧飯田村）、「尾谷」は大字内山（旧内山村）にあり、慶長６年当時とは所属する村を異にしている。

江戸時代以降、高岡郷内の村の領域がどのように確定されていったかは、史料の制約から分析することは難しいが、久津良が河上文書に見える慶長11年以降、「村」として文献上から姿を消していることを考えると、慶長年間以降、「村」の領域の確定が進む中で、内山村・五町村・飯田村の中に取り込まれていったと考えられる。

２．内山と飯田

伊東四八城と「内山」「飯田」　14世紀末から15世紀前半にかけての時期には、平賀（久津良）・飯田城に拠る門川氏（石塚氏・平賀氏）を中心として「久津良」の地をめぐる攻防が繰り広げられたが、永享４、６年の島津・伊東両氏の攻防の中で、「久津良」「飯田」は伊東惣領家か島津氏の勢力下となり、「久津良」の名も次第に登場しなくなる。そして、それにともなって内山城を中心とする「内山」の地が重要な地となり、「内山」「飯田」に拠点が置かれる。

「内山」は、現在では大字内山、江戸時代は内山村として登場し、主に大淀川から綾へと続く往還の途中に位置する。中心となる内山城は、『高岡名勝志』によれば、栫城とも言い、「御仮屋より酉（西）之方　道法半里程」の位置にある（現大字内山字栫）。そして、この内山城から大淀川までの間には、池之尾城・尾谷城・福ケ城・平賀城と一連の城館群が連なっており、大淀川～内山～綾筋の重要性がうかがえる。

文安元年（1444）9月8日、伊東惣領家の跡を継いだ祐堯は、翌2年、「土持同心」にて穆佐城を攻略、落合治部少輔を地頭に配置した。また、翌3年から5年にかけて、細江・石塚城を攻略し、清武祐行跡である木原・加納・舟曳・今泉（以上現清武町）・田野（現田野町）の地を知行した。こうして、内山の地も、これより前に知行した平賀（久津良）とともに、河南の地も伊東惣領家の勢力下に入ったと思われ、島津氏の知行した飯田の地も手中に収めたものと考えられる。

文明16年（1484）、伊東氏は櫛間に拠る島津式部太輔久逸の頼みにより、飫肥の新納氏を攻めた。その際、祐国の弟祐邑が率いた外城衆には、清武・田野・石塚・穆佐・倉岡・飯田・内山・綾・紙屋・守永・須木とあり、このときすでに内山・飯田が外城として把握されていたことがうかがえる。

内山城主・飯田城主　『日向記』「分国中城主揃事」に記載される城主名の中に、「飯田城主　河崎治部太輔」「内山城主　野村刑部少輔」の名が見える。いわゆる「伊東四八城」と言われるもので、伊東氏の分国支配の統治単位とされた。各外城には地頭が任命され、外城の武士（衆中）の統率とその支配下の農村の統治を行った。

天文2年（1533）、伊東祐充の死後、伊東祐清（後の義祐）と祐武の子左兵衛佐との家督争いが激化すると、内山城はその舞台となった。それまで左兵衛佐方であった穂北・三納・平野・木脇・穆佐・八代・綾などが祐清方に属すと、左兵衛佐は内山城に立て籠もった。しかし、「野村」をはじめとした城内衆の内通によって祐清勢が城内に乱入、内山城は祐清方に属した（『日向記』「門川対治並祐吉早世事」）。

その外、『高岡名勝志』には、「伊東新左衛門居城、後に福永丹波守米蔵これ有り、城番川崎何某罷り在り候由申し伝え候」とある。福永丹波守は、天正5年（1577）、島津氏が伊東氏を追い落とした際、島津氏に内応し手引きした中心人物で、その当時は野尻城主であった（『日向記』「分国中城主揃事」にも「野尻城主とある」）。その外、同じく『高岡名勝志』に「浦之名村　今城」の項に、「福永丹波守居城」と見える。

島津氏領下の地頭　天正5年、島津氏の進出によって伊東氏が豊後に落去すると、内山・飯田の地は島津氏領となり、それぞれの外城に地頭と衆中が配置された。「高岡郷士系譜」前書（史料2）によれば、飯田には福永宮内少輔、内山には、天正8年には野村備中守文綱（一説に天正5年より）、その後鎌田出雲守政近、文禄初めには吉利下総守久澄、その後比志嶋紀伊守国貞が入番した。

『日向記』に「日州ノ内輪ニ野村党多カリケルカ」というように、野村一族が伊東氏家臣の中でも多く、野村肥前守の死後は、嫡子刑部少輔が内山地頭、娘二人が米良主税・福永丹波守の妻となっている。天正5年の島津氏の日向進出のとき、島津氏に内応し、その足がかりとなったのが野村・福永の一党であった。このときの野村氏を『庄内平治記』には野村備中守文綱とあり、「刑部少輔」と野村備中守が同一人物であったと考えられる。「天正八年　肥後水俣陣立日記」（『入来文書』）には、内山地頭として、野村備中守文綱の名が見える。また、天正12年（1584）、宮崎城主上井覚兼が去川で「犬山狩」を催し、宮崎へ川舟にて帰る途中、内山の元（顕）本寺に立ち寄り、野村刑部少輔（文綱のことか）が出迎えている（『上井覚兼日記』）。この後の野村備中守は、天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州征伐により大隅国山田城（現鹿児島県姶良町山田）に召替となっている（明和3年（1766）「野村家由緒」鹿児島大学図書館蔵）。子孫は、鹿児島衆中野村五郎左衛門。また、高岡町尾谷の弓袋には、野村備中守と伝えられる天正13年の墓が残っている。

比志嶋紀伊守国貞が内山地頭となったのは、それまでの地頭吉利下総守忠澄が死去した文禄４年（1595）８月４日以後のことである（吉利下総守忠澄の墓は国富町法華岳寺に現存）。国貞は、比志嶋宮内少輔国真の子で、慶長元年（1596）に老中となっている。

慶長期における外城衆中　地頭とともに配置された衆中は、島津氏の支配組織の中においては、知行を与えられる直臣で、平時においては地頭居城の周辺に住み、戦時においては地頭の指揮のもと一つの軍事組織として戦闘に参加した（『宮崎県史』通史編中世）。

慶長５年の高岡郷成立以前における外城、内山・飯田・八代に居住した衆中については、その全貌を明らかにすることはできないが、「高岡郷士系譜」（『高岡町史』上巻所収の表より）に記載される高岡郷士の出身地によりその一端を知ることができる。「高岡郷士系譜」は、近世後期になって、高岡郷士大迫元苗（1748～1826）によって執筆された、高岡郷士700家余の由緒を綴ったものである。よって、天正～慶長期における衆中の移動については把握できないが、高岡郷成立直前における出身地については知ることができる。

この「高岡郷士系譜」では、慶長期における内山・飯田・八代衆中については「高岡居付」「八代居付」などと記されている。これで見ると、「高岡居付」が26人、「八代居付」が43人となっている。「高岡居付」の中で、飯田が２人、五町が２人とあり、この４人については飯田衆中であり、残りの22人と「日州居付」と記された去川関所番二見源右衛門が内山衆中であったと考えられる。慶長５年において、高岡郷以外へ転じた者もいたと考えると、当然、これ以上の衆中が存在したものと考えられる。

文禄４年、島津義弘は五町村にある大日寺（現高岡町大字五町）寶積坊に「飯田村之内大日寺前田うしろ田壱段」を「老僧居住之地」として遣わしている。大日寺は、頼慶法印の開山、真言宗高福寺の末寺で、天正16年（1588）には内山村の中で５段の寺を拝領している寺である（「高岡名勝志」）。この文禄４年の文書の宛名として「内山村　談合衆中」とあり、「高岡名勝志」の註として「右者高岡郷召立られざる以前は、内山村へ諸士罷居候由に御座候」というように、内山城近くに衆中が居住していたと考えられる。

第２節　高岡郷の成立と天ケ城

１．高岡郷の成立

稲津の乱と高岡郷の成立　慶長５年（1600）９月、関ヶ原の戦いから帰国した島津義弘は、堺より船で細嶋に上陸、途中、佐土原に豊久（関ヶ原戦死）夫人を弔問し、八代に宿泊した。一方、この時、伊東家の家臣稲津掃部助祐信は、高橋氏領であった宮崎城を奪い、島津領である穆佐・倉岡・八代に侵入し、諸所にて戦闘がおこなわれた。

「高岡郷士系譜」によれば、義弘は八代福島佐渡介（後高岡衆中）宅在宿中、稲津軍が三名（現西都市）のあたりまで放火してまわるのを直接目にして、「大牙之地」で「屈竟之境」であるこのあたりを危うく感じたのか、深い思慮の結果、関外（去川の関外）の「本ト城」を召し立てるよう仰せ出され、久津良名の地に新たに城を築き、これを天ケ城と名付け、外城を高岡と号したという。そして、鹿児島・伊集院・加世田をはじめとする薩摩・大隅・日向一帯から700余人の武士を召し移らせ、高岡の守りを固めた。この高岡郷の範囲は、内山郷の内より内山村、飯田郷の内より五町村・飯田村、綾郷の内

より入野村、穆佐郷の内より高浜村、倉岡郷の内より花見村、野尻郷の内より浦之名村、八代郷の内より田尻村、向高村、深年村、八代南俣村、八代北俣村の合計12ケ村を合わせたもので、郷廻り約40里、高２万755石余というものであった（『藩法集８　鹿児島藩下』）。また、この高岡郷に最初の地頭として任命されたのは、内山地頭であった比志嶋紀伊守国貞であった。

天ケ城の築城と終焉　「高岡郷士系譜」によれば、700余人にも及ぶ衆中の召し移りは「子冬（慶長５年冬）」から「丑春（慶長６年春）」にかけて行われたとある。慶長５年冬から同６年春といえば、稲津の乱の真っ最中であった。

慶長５年10月４日、稲津の軍勢が穆佐城近くの上木佐越のあたりまで進出し、島津勢と合戦に及んでいる。また、11月20にも稲津勢が穆佐城を攻め、「惣城戸」一重を打ち破っている。翌６年になっても合戦は続き、３月にも島津勢は穆佐城に追い籠められている（『日向記』「島津家与数度合戦ノ事」）。このように、この時期、穆佐・倉岡・八代においては稲津軍との戦場となり、また内山においても緊迫した状況にあったと考えられ、天ケ城の築城と高岡への諸士の召し移りについても、非常に緊迫した中でおこなわれていたと考えられる。

慶長６年８月12日付の、北郷忠能宛町田久幸・伊勢貞昌差出の書状（「北郷文書」『日向古文書集成』所収）に「高岡御城戸」のことについての記述がある。「城戸」とは、城の構の要となる出入口のことで、天ケ城についても何重かの「城戸」が設けられていた。この中で、「御普請大形相調」ということで、町田・伊勢の両氏は富隈（現鹿児島県国分市）の方に帰っている。つまり、高岡御城とは天ケ城のことと考えられるが、この慶長６年の８月前後には大体の普請が完了していることがわかる。

このように緊迫した中で、短期間のうちに新しく城を築き、郷を設置した背景には、前述の義弘の憂慮と、稲津の乱への戦闘参加のために、薩摩・大隅・日向の諸士が日向表に数多く出張してきたことがあったと考えられる。これは推測の域を出ないが、三ヶ国から出張してきた多数の諸士たちが、稲津の乱からの防御のために天ケ城を築城し、そのまま城内に居住し、乱の集結後も関外警備の必要性から高岡衆中として高岡に居住したと考えられる。近世において高岡郷に居住する衆中には、他郷に比して高禄の者が多く、このような点からもこの成立期の高岡がいかに重要であったかがわかる。

慶長７年、「世上茂静謐」になると、下城が仰せ渡され、城内に「曲輪取」している武士たちも麓に屋敷を構えるようになった。（「高岡郷士系譜」）。このように天ケ城が城として活用された時期はわずか２年足らずと、非常に短いものであった。

２．文献に見る天ケ城

天ケ城への衆中の居住　ここでは、「高岡名勝志」「高岡郷士系譜」など、文献史料に記載される天ケ城の概要について若干考察してみる。

南九州における中世の山城においては、文献上に外城の衆中が城に居住するケースがよく見られる。それは、堀切によって区分されたいくつかの曲輪を持つ南九州特有の大規模な城郭跡を目にすればある程度納得するものである。上井覚兼の宮崎城においては、衆中は「麓之衆中」と呼ばれる地頭居城周辺地に住むものと、「城内之衆中」と呼ばれる居城内に住むものに区別され、それは身分的にも「城内之衆中」は上級者、「麓之衆中」は下級者と区別されていた（『宮崎県史　通史編中世』）。それは、他の城においても同様で、穆佐城においても地頭川田大膳亮国鏡の時に「城内へ屋敷下され移居候衆」として

24名の名をあげている（「近郷穆倉岡綾高城山之口勝岡野尻須木由緒」横山家文書）。また、伊東氏領時代にさかのぼって、池之尾城（高岡町大字内山新田地区）では、城の中に掘切があり、その東側の曲輪を落合四郎左衛門、西側を柚木崎吉介が居城していたとあり、各曲輪毎に諸士が拠っていたこともわかる（「高岡名勝志」）。

天ケ城においては、前述したように、慶長7年の下城のときには「曲輪取いたし居候諸士」も城内を引き取り、麓に屋敷取りしたとあり、わずか2年の在城ながら城内に居住したということがわかる。

御取建の節、地頭相談役として高岡に来ていた伊地知佐渡は、後に倉岡地頭となるが、それまでの間「高岡ニ而ハ天ケ城二丸ニ住」とある（「高岡郷士系譜」）。また、河上次郎左衛門尉忠宅についても、高岡郷召立の時は「内山之城（天ケ城）本丸」に居住していた（「河上氏系図」河上文書『宮崎県史通史編中世1』）。このように、天ケ城においては、本丸・二丸と呼ばれる中心的な曲輪にも諸士が居住し、屋敷を構えていたことがわかる。

「高岡名勝志」に見る天ケ城　天ケ城においても衆中が居住していたことは前述した通りであるが、それではこの天ケ城がどのような形状をしていたのか、江戸時代後期の史料である「高岡名勝志」の記述によって見ていくことにする（「高岡名勝志」については付録の解題を参照）。

「高岡名勝志」では、天ケ城について、「高岡城山」「麓城」とあり、「麓城」の記述の中に「城を天ケ城と御名附」と天ケ城の名を記述している。そして、曲輪については「丸数六」として「本丸」「二之丸」「三之丸」「天ケ城」「西之城」「北之城」の名をあげている。この曲輪名に見える「天ケ城」と区別する意味で「高岡城山」「麓城」という記述をしたのではないかと考えられる。この天ケ城という名については「高岡郷士系譜」にも「久津良之内を新に城地に御取建、城を天ケ城と名付、内山の城を天ケ城と申候ニ付、持越ニ而改号有之由」とあり、内山の城を天ケ城と呼んでいたので、新しい城にも天ケ城と命名したことがわかる。また、同様の記事が「高岡郷士系譜写」（横山家文書）にも見える。「城山之儀者内山城之写シと申事、内山□（虫損）天ケ城と申所有之候、当城山ニ茂天ケ城有之候」とあり、内山城の曲輪の名称を天ケ城に持ち越したようである。しかし、いずれも近世後期の史料ということもあり、断定することはできない。

城山の高さは「45間（約81.8m）」で、6つの曲輪とも同じ高さであった。この約81.8mは、恐らく麓からの高低差を示しているのであろう。また、表3は、「高岡名勝志」に見える天ケ城の各曲輪の大きさについて示したものである。曲輪の中では「本丸」が縦軸156.4m、横軸54.5mと一番大きく、それに二之丸、天ケ城、三之丸と続く。西之城と北之城についても、「せがい」と呼ばれる部分の大きさから考えて比較的大きい曲輪であったと考えられるが、史料の虫損のため不明である。次に、城への登り口であるが、「大手之口より小谷口の右さし迄」が約269mとある。「大手之口」とは、現在の大字内山大手迫に下りる道筋で、城山の南東部にあったと伝えられている。また、「小谷口」とは現在の尾谷地区側の登り口と考えられ、城山の西側に位置する。そして、6つの曲輪の「惣廻り」が約3187mと、かなり大規模な城であったことがわかる。

ところで、史料中には曲輪と曲輪の間にある「せがい」と呼ばれる部分の大きさを記している。意味からして城の堀切の部分を指しているということは推測できるが、具体的にどの部分の大きさを示しているのかは不明である。ただ、「二之丸と三之丸の間せがい」の「竪竿」の方向（北北西―南南東）と距離（約40m）が、「二之丸」の「横竿」の方向（北西―南東）と距離（約40m）、「三之丸」の「竪竿」

の方向（北西―南東）と距離（約40m）とほぼ一致する。よって、二つの曲輪の間にある堀切の長軸の長さであると推測できる。また、本丸と二之丸の間、二の丸と三之丸の間、西之城と北之城の「せがい」については、「横竿」が一様に「四間（＝約7.3m）」となっている。よって、堀切の短軸の長さだと推測できる。しかし、これが曲輪の上場と上場の距離であるのか、堀切の底の幅であるのかはわからない。

表３　「高岡名勝志」に見る天ケ城の曲輪の大きさ

内　容	竪　竿		横　竿	
	方　向	距離（m）	方　向	距離（m）
本丸	北北東―南南西	156.4	西北西―東南東	54.5
本丸と二ノ丸の間せがい	北北西―南南東	40.0		7.3
二ノ丸	東北東―西南西	3.4	北西　―南東	40.0
二ノ丸と三ノ丸の間せがい	北北西―南南東	40.0		7.3
三ノ丸	北西　―南東	40.0	北東　―南西	16.4
天ケ城	北西　―南東	58.2	北東　―南西	36.4
三ノ丸と天ケ城の間せがい	北北東―（南南西）	32.7	西北西―東南東	18.2
西ノ城北の城（以下虫損）	（北北西）―南南東	96.4		7.3
大手口より小谷口の右さし迄	東北東―西南西	269.1		
西ノ城と北ノ城せがい（本丸南）	北東　―南西	163.6		
丸数６ツ惣廻り		3187.3		

（註）
１．原本は「高岡名勝志」（高岡町教育委員会蔵）による。
２．方向は、距離を記した直線の方向を示す。
３．距離については１間＝1.81818mで計算し、小数点第２位以下は四捨五入した。
単位はメートル。

最後に、「高岡名勝志」に見える曲輪と地形図に見える平坦部（曲輪と見られるもの）とを比較し、推測ではあるが曲輪の比定を試みたい（第19図参照）。「本丸」については、軸の方向・距離から見て北側の８．９．10の部分でほぼ間違いない。「天ケ城」についてもその軸の方向・距離から見て東側の12の部分と考えられる。また、「西之城」「北之城」については、曲輪の軸の方向・距離が不明であるが、その名称から推測して本丸から少し離れた位置にあったと考えると、「西之城」が２、「北之城」が3.4であろう。不明なのが「二之丸」「三之丸」である。軸の方向・距離から考えると、「二之丸」が5.6の部分、

「三之丸」が7の部分と思われるが、「本丸と二ノ丸の間せがい」の軸の方向が北北西―南南東というのが、少し矛盾する。しかし、曲輪の名称の意味から考えて、「二之丸」が「本丸」のすぐ近くにあり、「三之丸」がより出入口に近い位置にあるとすれば、前記の推測にも比較的合致する。

以上、「高岡名勝志」の記述から、天ケ城の概要を分析してきたが、同史料はあくまで近世後期の史料であって、その記述においても事実とは若干のズレもあるものと考えられる。よって、ここでは結論はあくまで推測にとどめ、後は考古学的な視野からの分析に結論を譲るものとする。

(付録)「天ケ城」関係史料

天ケ城については、その活躍した年数も短く、それを記す史料もわずかに近世後期に書かれた記録類に記されているだけである。ここでは、その記録の中から「高岡名勝志」と「高岡郷士系譜」の二つの史料について、天ケ城に関係する部分を抜粋し、紹介することにする。そこで、ここではその二つの史料について若干の紹介をしておく。

「高岡名勝志」は、近世後期に薩摩藩が各外城に命じて史料を提出させ、後に『三国名勝図絵』編纂のためとしたものの控えで、文政2年(1824)に作成されている。本文230丁、縦28.5cm、横20cmで、高岡郷内に存在する村里、寺社、古跡などの位置、由来など、様々なことが書き記されている。天ヶ城についての記述も、数少ない史料の一つであり、それ以外の山城についても見られる。現在は、高岡町教育委員会所蔵で天ケ城歴史民俗資料館に保管され、町の有形文化財に指定されている。また、本史料については、宮崎地方史研究会刊行の「研究資料第1集　高岡名勝志」に全文翻刻され、紹介されている。ここでは、それを参考にしつつ、原本により史料紹介を行った。

また、「高岡郷士系譜」は、近世後期、高岡郷士大迫元苗(1748～1826)の手によって、高岡郷士700余家の系譜を調査、執筆された膨大な史料である。同史料は、その後の『高岡郷土史』(昭和7年刊)、本吉直二著『高岡人物誌』(昭和42年刊)、『高岡町史』(昭和62年刊)などに引用され、高岡の歴史を語る上で重要な史料であった。しかし、現在は高岡にその所在はなく、その全貌を知ることはできなくなっている。ここに紹介する史料については、同史料の前文の部分を筆耕された故宮原親利氏(元文化財保護審議委員)のノート(現在は天ケ城歴史民俗資料館に寄贈)に拠った。天ケ城についての記述だけでなく、高岡郷の成立時の様子を知る上で興味深い史料と言える。

1.「高岡名勝志」(抜粋)

(前略)

高岡城山高サ四拾五間　但九数六ツハ同高寸ニメ壱分弐厘五

一　本丸壱町弐拾六間　丑ノ方より

未ノ方ニ當テ　竪竿

寸ニメ弐部三厘八毛八八

一　三拾間　卯辰ノ間より

西戌之方ニ當テ　横竿

寸ニメ九厘四毛四四

本丸と二ノ丸ノ間せがい

一　弐拾弐間　　亥子ノ間より
　　己午ノ間當テ　　竪竿
　　寸ニ〆六厘壱毛一横四間

一　二之丸四拾六間　　寅ノ方より
　　申ノ方ニ當テ　　竪竿
　　寸ニ〆壱分弐厘七七七

一　弐拾弐間　　辰己之方より
　　戌亥ノ方ニ當テ　横竿
　　寸ニ〆六厘壱毛一一

二之丸と三之丸間せがい

一　弐拾弐間　　亥子ノ間ヨリ
　　乙午ノ間ニ當テ　横竿
　　寸ニ〆六厘壱毛一一横四間

三ノ丸弐拾弐間　　辰己ノ間より
　　戌亥ノ間當リ　竪竿
　　寸ニ〆五分弐毛七弗七

右者高岡之内深歳村川端ゟ荒志之宮之下小野まて
　　寸ニ〆六厘壱毛一一

一　九間　　丑寅ノ間より
　　未申ノ間ニ當テ　横竿
　　寸ニ〆弐厘五毛

一　天ケ城三拾二間　　辰己ノ間より
　　戌亥ノ間ニ當テ　竪竿
　　寸ニ〆八厘八毛

一　弐拾間　　丑寅ノ間より
　　未申ノ間ニ當テ　横竿
　　寸ニ〆五厘五毛五五

三ノ丸と天ケ城間ノせがい

一　拾間　　卯辰ノ間より
　　酉戌ノ間ニ當テ　横竿
　　寸ニ〆弐厘七毛七七

一　拾八間　　丑ノ方より

（約三行破損不明）

西（不明）

一　五拾三間　　己ノ方ニ當テ
　　寸ニ〆壱分四厘七毛二横四間

一　弐町弐拾八間　　寅卯ノ間より
　　申酉ノ間ニ當テ　竪竿
　　寸ニ〆四分壱厘一一一横四間
右者大手之口より小谷口之右さし迄本丸二三ノ丸
西之城北之城せがい
一弐町三拾間　　丑黄ノ間より
　　未申ノ間ニ當テ　竪竿
　　寸ニ〆弐分五厘

右者本丸南ノ方せがい
一　弐拾九町拾三間寸ニ〆四寸八分六厘六六
右者丸数六ツノ惣廻り
一　高岡城山より穆佐城己ノ方ニ當
一　高岡城山より倉岡城卯辰ノ方ニ當
高岡之内
一　八代古城高サ拾五間但丸数六ツ同高サ
　　寸ニ〆四厘壱毛六六
一　古城弐町四拾間　　酉戌ノ間より
　　卯辰ノ方ニ當テ占竪竿
　　寸ニ〆四分四厘四毛四
一　拾九間　　子ノ方より
　　午ノ方　　横竿
　　寸ニ〆五厘弐毛七七
　高岡廻竿始
一　壱里弐拾六町拾八間　　秋月殿
　　高岡　　境
　　寸ニ〆壱尺三分八厘三三三
右者高岡之内花見村樋渡占田尻村川端迄
一　四里拾五町拾間　　有馬殿
　　高岡　　境
　　寸ニ〆弐尺六寸五分二厘七毛五弗
右者高岡之内田尻川端占深歳村川端迄
一　三町壱間　　秋月殿
　　高岡　　境
　　（中略）
一麓城
　慶長五年庚子九月惟新公関ヶ原御帰陳之節、八代福嶋佐渡之介御中途迄御迎ニ罷出、直ニ福嶋か宅江

御供仕被遊御入候、其砌者世上物騒ニ而候、就中伊東家之臣稲津掃部介裕佳同丑之介諸所を浸シ、八代江被遊御座候、夜も近方三ケ迄致放火候を御直ニ被遊御覧、犬牙之地ニ而屈竟之境なれは、御念遣被思召上候由被遊御意、深御思慮有之、関外之本ト城可被召立旨被仰出、久津良名之内を城地ニ御取立、城を天ケ城と御名付、外城を高岡と被写、四拾餘ヶ所より士被召移、其外内山飯田深年八代諸所へ罷居候士も罷召置、都合七百三拾人餘子冬　五春迄被召移、給地高壱万三千石餘被下置候

一久津良

高岡麓之邊惣名を住古は久津良と申候、應永年鑑久豊公穆佐御在城之砌、元久公と御不和ニ而、被遊御合戦之節毎度御取合御座候所と被申傳候

内山村

一池之尾城　本御仮屋より酉之方

道法半里程

天文二年之比伊東武藏守嫡子伊東左衛門佐裕清居城之由申傳候

元亀年鑑柚木崎丹後守致居城候由申傳候

右之城者中之堀切有之、東者落合四郎左衛門、西者柚木崎吉介致居城居候由、右丹後守居城以後ニ而可有之と考申候

右同

一栫城　御仮屋より酉之方

道法半里程

伊東新左衛門居城後ニ福永丹後守米藏有之、城番川崎何某罷在候由申傳候、天正八年之比野村備中守夫より鎌田出雲守政近、文禄之始ニ者吉利下羅守忠澄地頭ニ而被差越居候、其後比志嶋紀伊国貞内山入番ニ而在城有之

右同

一尾谷城　本ト御仮屋より酉之方

道法拾町程

但水なしの城共申候

野村新介居城と申傳候一説ニ伊東新介共申候

右同

一福ヶ城　本ト御仮屋より申之方

道法八町程

何年鑑何某居城相知不申候

右同

一平賀城　御仮屋より未申之方

道法五町程

嘉慶元年辛酉伊東裕能居城之由申伝候、但嘉慶元ハ丁卯年年号欤年付欤誤ならん

永享五癸丑年落城之由申傳候

高浜村

一楠見城　御仮屋より未申之方

道法半里程

税所肥前守居城之由、落城年鑑前文同断

五町村

一柚木崎城　御仮屋より申之方

道法二里程

応永年鑑伊東大和守裕安領内ニ而候処、久豊公御責取被成候と申傳候、其居城候儀相知不由候、其後又々伊東領之節柚木崎丹後守居城之由申傳候

右同

一長崎城　御仮屋より未之方

道法一里程

柚木崎丹後守一類之人居城之由申傳候

飯田村

一飯田城　御仮屋より北之方

道法拾五町程

嘉慶元辛酉年伊東肥州取建候条と申傳候

永享六年申寅十一月晦日伊東家御和睦ニ而、飯田城御手ニ入候と申傳候、天正之比福永宮内少輔居城ニ而候

浦之名村

一今城　御仮屋より申之方　石之城共申候

道法壱里半程

福永丹波守居城之由、申傳候年鑑相知不申候

右同

一古城　御仮屋より申之方

道法壱里八合程

但城之名相知不申候

福永駿河守居城之由、申傳候年鑑右同断

田尻村

一古城　御仮屋より子之方

道法壱里程

但城之名相知不申候

小森何某居城之由、申傳候年鑑右同断

向高村

一古城　御仮屋より亥之方

道法半里程

但書同断

向高村何某居城之由、申傳候年鑑右同断

入野村

一古ル屋　御仮屋より亥之方
　　道法壱里八合程
　但竹之内城ヌハ垂水之城共申候
　垂水何某居城と申傳候、年鑑右同断
深年村
一諏訪城　御仮屋より子之方
　　道法壱里余
　何某古城并年鑑右同断
右同
一谷口城　御仮屋より子之方
　　道法弐里程
　但寺尾城共申候
　右同断
右同
一東之城　御仮屋より
　　道法壱里余
　右同断
右同
一入佐城　御仮屋より子之方
　　道法壱里余
　右同断
右同
一柳之城　御仮屋より亥子之間
　　道法二里余
　右同断
右同
一禮ヶ城　御仮屋より亥子間之
　　道法三里程
　右同断
八代南俣村
一八代城　御仮屋より子之方
　　道法弐里余
　伊東藤内左衛門尉裕広居城由、延文三年戊戌十二月晦日土持新兵尉宣栄攻落候由相見得申候、其後伊東傾ニ相成、八代長門守居城之由申傳候、天正十三年之比伊勢長門守貞清、其後相良日向守長泰地頭ニ而在城域有之
右同
一高城　御仮屋より亥之方

道法三里半程
但猪之見城共申候
伊東裕広居城之処、延文四年亥正月三日土持宣栄、右裕広を猪之見城ニ而討取と相見得申候
右同
一栫井城　御仮屋より亥子之方
道法四里程
何某居城并年鑑相知不申候
右同
一谷ヶ城　御仮屋より亥子之方
道法四里程
右同断
右八代之儀住古者八城と申候而、八ヶ城有之候由申傳候、其城々左ニ相記申候
八代南俣村
一八代城
右同
一高城
右同
一栫井城
右同　深年村
一谷ヶ城　一柳城
右同
一禮ヶ城
御領ハ幡村
一瀬戸城　但精之城共申候
佐土原小野村
一小野城
高鍋領伊佐生村
一伊佐生城　但古陳揚共申伝候
日向名所いさふの関　能因、此伊佐にて候事と申事候へ共、
歌枕ニ出邊土故慥ニ相知不申候
右九ヶ所之内八ヶ城を八城と申候由申傳候得共、委敷相知不申候
飯田村
一河骨　御仮屋より卯辰之方
道法五町程
永享四年壬子七月十四日伊東家と御合戦有之候由、河骨合戦と申傳候
一田尻村惣陳　御仮屋より子之方
道法壱里程

天正十五年秀吉公御国発向之砌、日州口之大將大和大納言秀長陳場と申傳、尓今惣陳と申候
高岡内山村之内
一御関所（朱）「本御仮屋より未申の間三里拾丁程」
去川御番所被召建候以来、二見休右衛門先祖代々万人相勤申候、且当ニ見納右衛門六代之祖二見弥三左衛門江依願番人被仰付、其以後両人ニ而相勤申候、休右衛門方江者年々御切米拾八石被仰付、納右衛門方江者高弐拾五石被下置候、書役三石六斗渡守三石六斗被下之候
但御番所被召建候年間相知不申候、下番之儀者休右衛門下人共相勤申候
（後略）

2.「高岡郷士系譜」前書より抜粋（宮原親利氏筆耕ノートより）

當所之儀ハ、元来内山・飯田・久津良・田尻・深年・八代杯と申村ニ而、其内小村数々有之候中ニ、八代ハ天正十二年之頃伊勢長門守貞清入道如閑地頭ニ而、隅州廻ゟ茂士被召移在城有之、慶長ノ初ニハ相良日向守長泰地頭ニ而候、飯田ニハ暫福永宮内少輔罷居、内山之城ニハ天正八年ニ入野村備中守、夫ゟ鎌田出雲守政近、文禄之初ニハ吉利下総守久澄地頭ニ而被差越居、其後比志嶋紀伊守国貞内山
（行間）
元亀三年日州内山給地頭職
吉利家々譜　文禄三年甲子日州内山地頭ヲ給故杉（ママ）居、同四年乙未八月於日州高岡内山卒ス、歳四十七法岳性梅宗乾居士　安藤刑部

入番ニ而在城有之候処、慶長五年庚子九月惟新公関ヶ原御帰陣、同月廿九日八代福嶋佐渡介宅被遊御入、御止宿被遊居候処、其頃ハ何方茂不穏、就中伊東家之家臣清武地頭稲津掃部助祐信、同弟牛之介此近方あぶれ廻り、諸家を浸し、村々を放火し、八代江被遊御座候夜迎方三ヶ名迄火を掛却カシ廻り候を、惟新公御直に被遊御覧、大牙之地ニ屈竟之境なれば甚危相見得候と被遊御意、深御思慮之上、関外之本ト城を可被召立旨被仰出、久津良之内を新に城地に御取建、城を天ケ城と名付、内山の城を天ケ城と申候ニ付、持越ニ而改号有之由、外城を高岡と被号、鹿児嶋・伊集院・加世田・伊作・田布施・川辺・日置・清敷・市来・串木野・百次・隈之城・百引・出水・羽月・入来・谷山・吉田・蒲生・山田・帖佐・向之嶋・加治木・国分・宮内・堂洗・菱刈・粟野・恒吉・財部・高山・大崎・都城・小林・高原・須木・野尻・東俣・綾・倉岡・穆佐外、肥後・豊後・日州新納院高城・財部・佐土原・都於郡・米良・田野・清武諸所しの里士被召移、本ゟ内山・飯田・深年・八代江罷居候士茂直ニ被召置、都合七百余人子冬ゟ乙春ニ掛リ被召移、給地高壱万三千石余被下置候、且野尻・紙屋之内入野村、穆佐内高浜村、倉岡之内花見村高岡江被召附、四ヶ所之本ト城と被仰候而被召立候、其節内山入番比志嶋紀伊守国貞高岡居地頭ニ被召置、引次ニ御息宮内少輔国隆迄城内江居地頭ニ而候処、同七寅年ニ成候得者、世上茂静謐ニ相成、城内江罷居候儀不相成旨被仰渡、地頭城下リ有之、曲輪取いたし居候諸士茂城内引取、当分之麓ニ致屋敷取候、寛永四卯年居地頭ハ御引取ニ而、府下ゟ掛持ニ而候、

親年ノ譜
勝久公貴久公へ御家督御譲後、大永七年御養子御違変ノ時節、御大切ノ旨御内通□七日也、親年従田布

ノ施罷越、虎寿公奉背負、小野迄被有御退、園田氏申合難題御遁、夫ヨリ田布セヘ偏路御越兼事ニ御供仕、其砌御国不穏折節、嶋津省我帖佐ヘ居住、日新公彼館ヘ御御成、親年ゲ刀□佐□草履取トシテ、奥迄被召刈御立被成候□御意ニテ、省我ヲ討申候、大永七年ゟ天文五年ニ至リ勝久公豊後ヘ御落被遊候前後、別而抽功依永吉、一所拝領被仰付、其節申上候、忍ニ知行格護仕候餘、多ノ衆ヘ申上返上仕候、後年伊作入木名ノ内原園水田永代拝領被仰付、彼地ニテ親年老死、

於□□数度之軍忠無比類感心ニ候、子孫永守此旨可抽戦功事、末代可為亀鏡者也如件、

永禄十二年五月六日　陸奥守入道伯囿御判

本田松閑

[　　]忠節致今無忘却候、伊作入木名之内、原薗并水田一町誠致徴者[　　]永代不可有異儀候、此趣忠入不可□間候、為後日鑑札如件

永禄十二年七月十二日　　日新御判

本田笑閑

親宗ノ譜

天文七實久依逆乱、日新公貴久公被遊御対陳、被召列戦死

親廣ノ譜

義久公義弘公九州御発向ノ節、於緒方抽戦功、九州大形御手ニ属シ、中国ニ御渡可被遊ノ条、彼地様子可承合被仰付軽衆被召附、中国ノ様子承合申上候、豊後御引陳夜軍ニ面、并負深年ヲ於其場吉富次郎川上次郎左衛門忠宅被疵、其敵貴嶋右京同源五郎川中ニテ討留申候

文禄元年高麗御[　]御在陳ノ中白浜次郎四郎

御成敗被仰付計申候

其[　]承候

於伏見幸侃御成敗ノ節、御本陣ト幸侃屋敷ノ間中門有之、為御用心其口御養[　]隠密被仰付、曽木甚右衛門同前相勤、就天面古疵故眠気悪盲目ニ罷成候

一高岡御取建以来ノ家計不致連続家ニ有之、先祖之代数共予問尋候茂有之候故、不図思立惣家継を取立候

一右書立候内ニ間違之儀有之候得者、家ニ瑕を付、其罪不少候、就中天倫次序系違候而ハ、家之嫡庶ニ掛事ニ而大切之至ニ候、己前ゟ嫡庶を争ひ儀ハ不対珎事ニ候得者、我預事ニ口事之媒を致候様之事共栫候而者、甚不本意次第ニ候、依之半バにてハ及猶豫取止ニ可致共存候得共、適思立儀不綴立茂亦遺恨ニ存書立候間、後年ニ成候而茂少シ之談をも被取糺出候ハヽ、即曽致可被置候是予カ本望ニ而候

一代々之儀数十冊之古帳を以書立候内、一代ニハ三度茂四度茂致改名候人茂有之候ニ付、後之名ハ其子と取違、又嫡子致出生其ノ子夭亡ニ而、次之帳面ニ而後之嫡子を最初之嫡子名替と見受違候類有之間敷も不被存候間、不審之事ハ其家々古老之人江相尋書置可被申候

一此家系家々之亀鑑ニ可成と存、為取立事ニても無之、元来数奇之事故書立置候間、猥ニ外見可斟酌候、乍然毛頭不相知家々衆、若茂尋候人有之候ハヽ、愚老慰ニ書立置候間、強(ママ)チニ実正とは不破致趣と申聞ケ、代数之儀共ハ可被申候

一其家々之出所由緒武功戦死又ハ家之面目ニ茂成候事を承伝、又ハ家譜を致一覧見覚居候分ハ書記候、然ハ此一冊を扱(ママ)らき候而、予カ伝聞候家ハ歴々ニ而由緒不書記家ハ出所茂不慥家之様ニ相見得候得共、兼而左様ニ而無之候今記置所者、予カ見覚聞覚候事共と九牛の一毛とやら書付候間、自今由緒又ハ文書等有之家々又ハ申伝ニ而有之事共慥成事候ハ追々書可申候、惜哉古き由緒可有と見掛候家茂間々有之候得共、書留等茂及紛失候哉、無之申伝不残候而甚残念存家ニ茂有之候

一間にハ系図を所持し秘蔵する輩茂有之候得共、近代記立たる物カと相見得、又ハ年間不合之所共有之、得心不致系図ハ不書入候

一其家盛ニなる節ハ家系由緒等茂気ニ付候得共、及衰徴候得者不頓着ニ而、二三代茂其なリにて打過候而ハ、名前だに不相知人茂有之、ケ様之家ハ不構事といへとも遺恨ニ存候、同志ゟ必可書立置と頻り不進メ被申候衆と有之候得と孝候ニ、愚老カ如ク徒ニ送ニ光候者ニて無之候而ハ不相成候、且兼而右式数奇之人ニ而無之候而ハ不相成候、且兼而右式数奇之人ニ而無之候而ハ不相調、且所之古き帳面茂役所之櫃におさめ有之候得ハ、無口能可取出事ニ而茂無之候得共、予勤之内土蔵虫付ニ而崩れ倒レ候砌、古帳悉ク土ニ埋候と甚惜敷存、手之及記揚置候事有之候ニ付、夫故最易借用茂調候半欤と存候、且愚老ニ茂七十ニ近リ成候得者、直ニ覚候事茂多々候ニ付、乍老衰茂其場ニ当リ候半人之勧メ茂左茂可有之存、文化六年己春ゟ打立、同九年申冬草稿相調候、未落着事共有之候ニ付、追々相記可書入と存候

大迫氏元苗

Ⅲ まとめ

高岡町は近世の行政区域であった高岡郷の一部と穆佐郷と紙屋郷の一部から成る。それらに所在する山城を中心とする城館は、高岡郷に関しては「高岡名勝志」から引用し、それ以外の郷は「三国名勝図絵」を参考にしている。それらから判明した城館数は16箇所あり、その中で所在が明らかで城館と判断できる遺構を伴うものは9箇所である。特にこの天ヶ城から西側に集中して存在する尾谷城、福ヶ城、上城、下ノ木場城、河上城などの城館は城域を特定することができず、一つの城館を構成する個々の曲輪の名称ではないかと思われる。また、平賀城についても所在ははっきりしているものの、一つの曲輪の名称であり、尾谷城や福ヶ城などと同じ城館の一曲輪にすぎないものと思われるが、現在いわれている場所の信憑性は乏しく、それらの曲輪をまとめた一つの城館が存在したものと思われる。

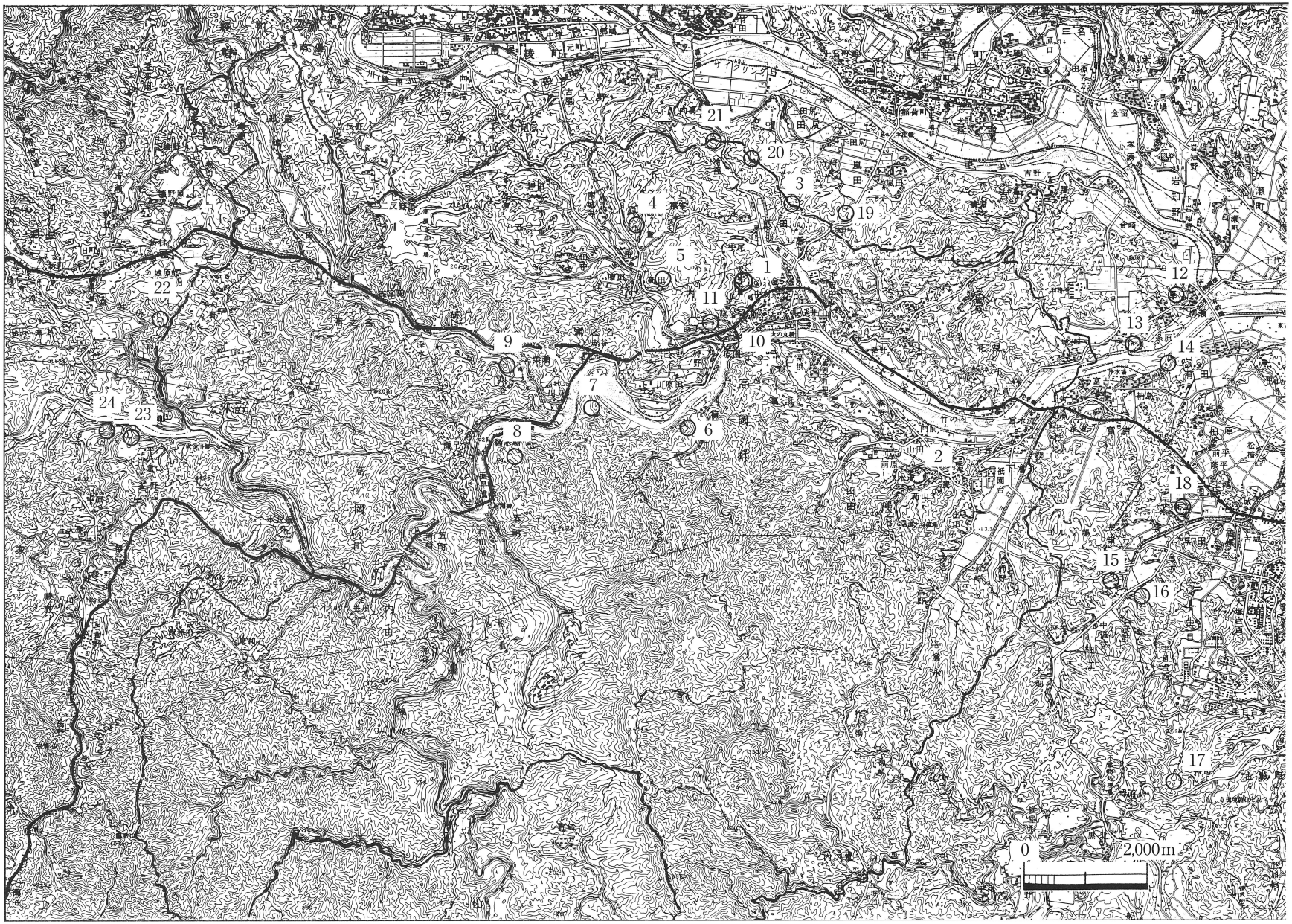
これらの城館は、立地をみた場合に町中央を流れる大淀川沿いに面してあり、さらに谷と谷が合流するところのやや小高い丘陵を利用して立地しているものが多い。それはすべて当時の交通の要であったと思われ、人の流れや物の流れを掌握するには非常に好都合な場所である。

また、これらの城館を規模からみた場合、穆佐城や天ヶ城のように大規模な城館とそれ以外の小規模な城館に大まかではあるが分けることができる。穆佐城や天ヶ城の城域は小規模な城館と比較すると倍以上であり、時期は異にするところがあるかもしれないが、立地場所も含めてその地域の政治と経済を掌握する中心的城館であったことが推測される。

天ヶ城跡は、城域約6haで14箇所以上の曲輪数で構成される。標高120m以上の丘陵で周囲は急傾斜を形成している。昭和40年代から公園造成の工事により曲輪のほとんどは破壊されており、縄張り図調査や埋蔵文化財調査等も無論為されないままの開発であり、詳細な記録は全く残っていない。そのため、天ヶ城跡の開発前の地形図と現在まで残っている曲輪部分や今回の調査において地形測量を行った成果をまとめ、中心部分だけではあるが1枚の図面（第19図）とした。これにより概略ではあるが、説明を加えていきたい。特に「曲輪の1～7」と「曲輪8」の南側は、今回の調査時にはすでに破壊されていた。

まず、天ヶ城の城域であるが、西側は幅約15mほどある堀「A」でその西端とする。堀「A」の西側はなだらかな傾斜地「1」が広がりその西側は急傾斜で落ちる。この傾斜地までが城域の可能性もあるが地形図で見る限り、「1」とした北側は尾根状となり曲輪としては弱い。遺構として明確に堀切の用途をもった堀「A」をもって西端と考える。それ以外は急勾配の自然斜面を城域とする。斜面は小規模な尾根が数多く谷を下るが尾根を遮断する堀切はない。ただ南側の尾根の南端に曲輪状の小規模な平坦地（護国神社）があるが、その途中を国道10号線が大きく遮断して破壊している。

主郭は曲輪「8」といわれている。曲輪「8」は城域のほぼ中央にあり曲輪内では最大の規模を誇る。北側に約0.5m低い段を設け曲輪「9」がある。その東側には腰曲輪状に曲輪「10」がある。曲輪「8」は堀「B」で南側の曲輪「5」から曲輪「7」と区画される。そして、曲輪「5」から曲輪「7」は堀「C」と堀「D」に区画される。堀「B」は西側で曲輪状に広くなり、東側で堀「C」と直角につながる。搦手門は堀「C」または堀「D」にあったとされる。曲輪「7」は「三ノ丸」と称されているとこ



1　天ヶ城
2　穆佐城
3　飯田城
4　栫城
5　池ノ尾城
6　楠見城
7　長崎城
8　柚木崎城
9　今城
10　平賀城
11　尾谷城、河上城、福ヶ城、他
12　柿迫城（仮称）
13　倉岡城
14　白糸城
15　圍城
16　宮ノ城
17　本城
18　石塚城
19　さじが城
20　田尻城
21　向高城
22　紙屋城
23　井ノ城
24　平八重城

第18図　高岡町内山城分布図

第19図　天ヶ城跡中心部旧地形図

ろと思われる。曲輪「7」の東側には堀「F」が入り込み「a」が土橋となって掘「G」に続く。曲輪「11」は「二ノ丸」、曲輪「12」は「天ヶ城」と言われている。しかし、「名勝志高岡」に記載されてい

表4　出土遺物集計表

				1号溝29 30層	1号溝31 32層	1号溝37層	2号溝	3号溝	4号溝	6号溝	6号溝	6号溝	7号溝	1号土坑	3号土坑	柱穴内	遺構検出面その他	合計
土師器	杯	口縁部		57	14	7	3			1	6	11				7	28	134
		底部	ヘラ切	12	2	2	2			5	3	4			1		16	50
			糸切	76	21	4	5	1	1	6	10	21				31	37	194
		個体	ヘラ切		1	2						3		1			2	9
			糸切	3	2					1	1	8				2	6	23
	皿	口縁部																0
		底部	ヘラ切														1	1
			糸切														2	2
		個体	ヘラ切		2											2		4
			糸切	1														1
	小皿	口縁部		12	1											1	1	15
		底部	ヘラ切														1	1
			糸切	8	1												2	12
		個体	ヘラ切		1	2					1					1	2	6
			糸切	7		1				2	2	1					1	14
	不明	体部		126	39		4				4	6				23	94	296
	碗	底部		3	2													5
	鉢	口縁部		1			1										2	4
		体部															1	1
	擂鉢	口縁部							1								2	3
		体部															1	1
	甕	口縁部		4		1			1	1				1			6	14
		体部		18	4	6	3			2	6		2			5	32	78
瓦質土器	火鉢風炉	口縁部		1						1	1	1					1	5
		体部								7								7
		底部								1								1
須恵質土器	甕	体部		2							1	1						4
	壺	体部									1						2	3
	不明	体部															1	1
国産陶磁器	備前 甕	口縁部			1													1
		体部					1			17		1						19
	壺	口縁部									1							1
		体部								4								4
	摺鉢	口縁部								1							1	2
		個体										1						1
	不明	体部															9	9
	唐津 皿	口縁部																1
		底部							1				1					2
		個体														1		1
	壺	口縁部														1		1
	碗	底部						1							1			2
	その他																1	1
	染付 碗	口縁部															1	1
		体部															3	3
	その他 碗	口縁部															2	2
		底部						1							1		9	11
		個体																1
	皿	口縁部		1												2	3	6
		個体																1
	壺	口縁部															1	1
		体部															4	4
	盤	個体															1	1
	その他	体部											1					1
		底部							1				1					2
輸入陶磁器	白磁 碗	口縁部									1							1
	皿	口縁部															1	1
	青磁 碗	口縁部		1						1	1						4	7
		体部															1	1
	皿	口縁部		2														2
	鉢	口縁部		1														1
	染付 碗	口縁部		1											1			2
		体部															2	2
		底部															5	5
	皿	底部							1									1
	盤	底部															1	1
瓦	軒平						1									1	10	12
	軒丸								1	1							2	4
土製品	土錘			1													2	3
石製品	石鍋									1								1
銀製品	釘															1		1
	その他															2		2
銅銭																3		3
鉄滓																	2	2
合計				338	91	25	20	3	7	52	39	58	5	2	4	67	309	1,020

る「二の丸」の規模からみると曲輪「11」はあまりにも小さすぎる。「二の丸」を規模だけで推測すると曲輪「5」と「6」を含めたところとなる。堀「G」の曲輪「11」と曲輪「12」が接近したところが大手門とされており、拳大から人頭大程度の礫が地表面上に集積している。曲輪「12」の東側に10m程下がったところに曲輪「13」がありそれが曲輪群の東端である。曲輪「5」と曲輪「2」は幅約20mほどの堀「E」により区画される。曲輪「4」は堀「H」と堀「E」をつなぐものでレベル差はなく堀底が曲輪状に広くなっているところである。その北側には曲輪「3」があり「北の城」と称されている。

このように、この城の構造は堀により曲輪を大きく区画しており南九州型の特徴を有している。縄張り中央は、堀「B」に対して直角方向に堀を入れ区画している。そして、西側に大規模な曲輪を二区画有し、東側は逆に小規模な曲輪群を有し中心部と土橋でつないでいる。これは地形的な制約を受けながらも、土橋「a」から東側と西側では構造が異なっており、西側においてはより強く南九州型の特徴が十分認められよう。土塁については、現存する曲輪も含めて全く確認されていない。以前は存在したものと推測されるが、開墾などによりすでに削平されたものと思われる。そのほかに、「b」では豊富な湧水が確認されている。

今回の調査は、曲輪「8」を中心とした調査で、土坑10基、溝状遺構8条、掘立柱建物跡9棟、柵列遺構3条が検出された。出土した遺物などから4時期に分けられるが、そのうち3時期は城館に関係する時期で残り1時期はそれ以前の時期のものである。

出土遺物については、全体的には、まず、輸入陶磁器類が少ないことがあげられる。時期的には、Ⅱ・Ⅲ期でほとんどなく、Ⅳ期になって国産陶磁器が多くみられるようになるが絶対数は少ない状況である。さらに、器種別にみて、供膳具は碗形態のものがあまり出土していない。これは陶磁器類自体が少ないためで、土師器杯類がそれを補っているようでもある。土師器杯、皿、小皿は底部ヘラ切り痕のものもあるものの糸切り痕のものが圧倒しているが時期的なことも考慮しなければならない。

Ⅰ期

この時期の遺構は、土師器の杯と甕を伴った1号土坑のみである。この遺構は土壙墓と思われるが、これに伴う建物跡などの遺構はなく、同時期の遺物は1号溝上層で流れ込みの状態で出土している以外は今回の調査では確認されていない。遺物から9世紀中～後半代とする。

Ⅱ期

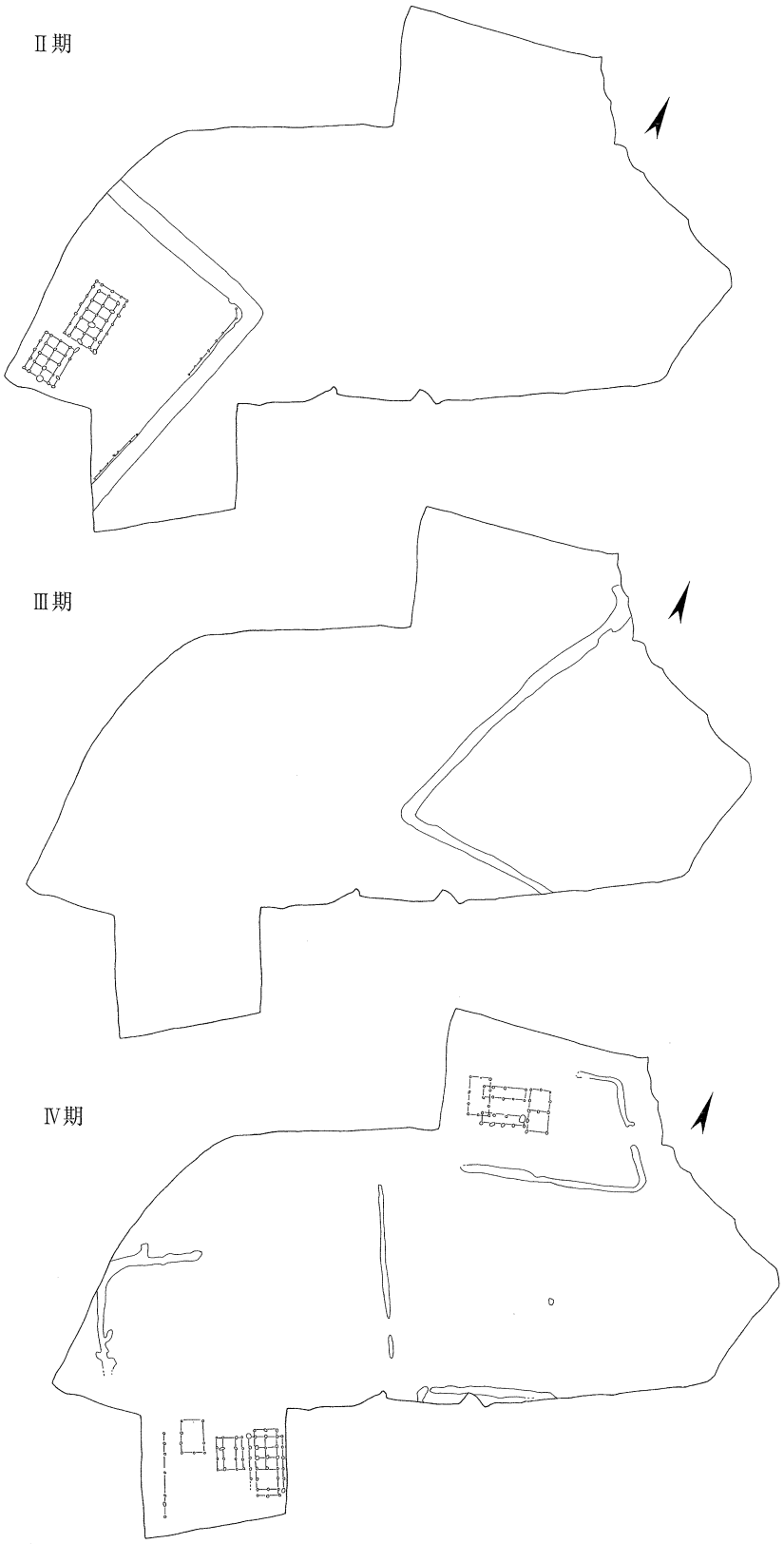
この時期の遺構は5号建物と6号建物とそれを囲む6号溝である。さらに1号柵列と2号柵列も含まれる。この二つの建物は桁行軸がほぼ南北にあり、他の建物跡とは異なっている。それを防御するかのように同じ方向性を持つ6号溝が建物の東側にあり、この溝（堀）でもって東側の防御とし、建物の西側は急傾斜で谷が迫っているためこの自然地形を利用している。6号建物跡の北側と溝の間に土塁状の遺構があったものと推定できることから、これらの建物は規模からみてもこの時期の重要な施設であったと思われる。この時期は6号溝からの出土遺物から、14世紀末から15世紀中頃までで特に15世紀前半と考えられ、伊東氏と島津氏の攻防が繰り返された時期であり、その後伊東氏の支配が浸透しつつある時期にも相当する。また、出土遺物の状況は輸入陶磁器類が少なく碗形態がみられない。出土遺物自体も少なく、一般的な生活空間とは異なっているように思われる。臨時的扱いが強い城館（曲輪）であったのではなかろうか。

Ⅲ期

この時期は１号溝を中心とする時期である。１号溝に確実に伴う遺構は確認されていないが、この溝に囲まれるところの遺構の幾つかは伴うものかもしれない。１号溝の方向自体は６号溝とさほど変わらず、この城館において大きな変化があったとは考えられない。しかし、６号溝と１号溝の位置関係やさらに溝の形状において６号溝が断面薬研堀に対して１号溝は断面箱堀であることから時期差があるものと思われる。ただ、時期的には近いものと思われ15世紀後半から16世紀前後のものと推定される。この時期も遺物を見る限りでは１号溝上層からは陶磁器類の出土はあるが、状況はⅡ期と変わりはなく重要視された城館とは思われない。

Ⅳ期

天ヶ城の最終段階の時期である。この時期の遺構は、１号～４号建物跡、７号～９号建物跡、２号～５号・７号溝、３号柵列、３号土坑を中心とする。まず１号～４号建物は３号溝と５号溝に囲まれるように検出されている。建物は溝の方向とほぼ一致し、その中での建物配置等からさらに最低２時期に分けることができる。４号溝は主軸方向や規模からみて３号溝と同じ用途が考えられ、建物を囲むように存在していたと推測される。さ



第20図　天ヶ城跡遺構変遷図

らに7号溝に関しても同じような用途が考えられ建物の規模はわからないがその東側に同じような方向に列びそうな柱穴群が存在している。7号～9号建物は1号建物と2号建物と同じ方向に桁行軸をとる。8号建物はこの時期の中では一番規模が大きく中心的建物である。そしてこの建物の周辺にそれよりも小規模な建物が2棟前後で群を成して存在したものと思われる。時期的には溝状遺構や柱穴から出土した陶磁器類から17世紀前後が考えられる。遺構からは6号溝が放棄された後でこの時期の建物群が出現することがわかっており、それは7号溝と5号建物との関係からもそれに近いことがいえる。この時期の建物の方向は、この城館の縄張りにおける堀「B」や堀「D」の方向とも一致し縄張りにおいても最終段階の時期と同じにすることが可能かと思われる。文献資料にある関ヶ原合戦直後の島津義弘によるこの城館の改修の記事は、この城館にとっては大きな画期として考えられ、遺構の上からもこれを裏付けるものとなろう。

天ヶ城跡における城館としての時期は、前記で示したように大きくⅡ期・Ⅲ期とⅣ期の2時期からなり、単純ではあるが前者は伊東氏支配が為された時期で後者は島津氏が支配した時期とで分けられる。特にⅣ期においては文献資料のうえからも、この城館が歴史上に姿を見せる時期であり、逆にⅢ期とⅣ期の間である16世紀代はこの城館の空白期間である。Ⅱ期の遺構はしっかりした規模の建物にそれを巡る堀が伴う。その堀の外側周辺では同じ時期の遺構は全く伴わない。逆にⅣ期の遺構は、中心的建物はあるもののそれ自体を堀で囲むことはせず、しかもその周辺に建物が存在する。城域や曲輪の配置自体も異なっているであろうから一概には言えないかもしれないが、曲輪の用途（役割）の違いは明らかである。

参考文献

1　岡本武憲　1995「各地の土器様相　九州南部」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
2　立石堅志　1995「瓦質土器　奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
3　横田賢次郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館
4　間壁忠彦　1991「備前焼」『考古学ライブラリー』60　ニュー・サイエンス社
5　大橋康二　1993「肥前陶磁」『考古学ライブラリー』55　ニュー・サイエンス社
6　都城市教育委員会　1991『平成2年度遺跡発掘調査概報　都ノ城跡(主郭部)』都城市文化財調査報告書第13集
7　高岡町教育委員会　1994『蕨野遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第6集
8　宮崎県教育委員会　1884『山内石塔群』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集
9　宮崎県教育委員会　1979「城内遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
10　宮崎県教育委員会　1988『車坂城西ノ城跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集
11　宮崎県教育委員会　1988『今江城（仮称）跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集
12　宮崎県教育委員会　1994『鳩園（東霧島神社）遺跡』
13　宮崎県教育委員会　1992『穂北城跡』
14　野尻町教育委員会　1986『新村遺跡・高山遺跡　東城原第1・2・3遺跡　紙屋城遺跡』野尻町文化財調査報告書第4集
15　山本信夫　1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『乙益重隆先生古稀記　念論文集　九州上代文化論集』
16　都城市教育委員会　1983『都城・中之城跡　菓子野地下式横穴墓』都城市文化財調査報告書第3集
17　都城市教育委員会　1997『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第38集

写 真 图 版

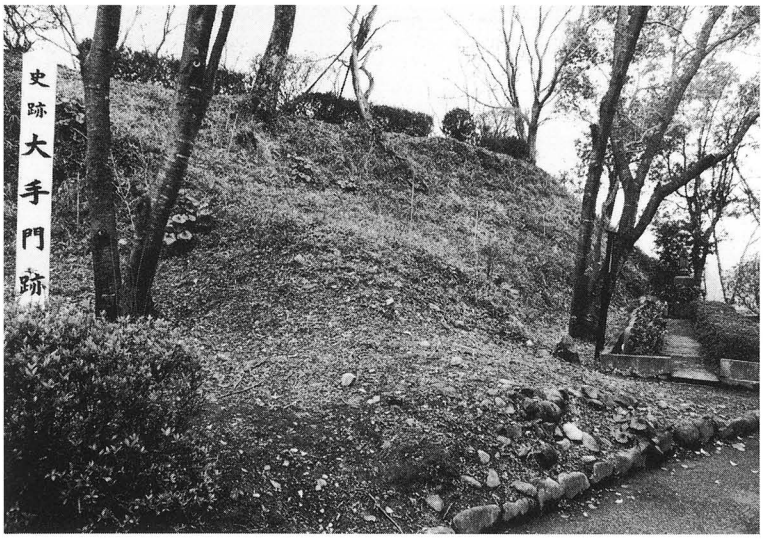
調査区調査前遠景と天ヶ城全景（東から）

1区遠景と天ヶ城全景（北から）

図版 2

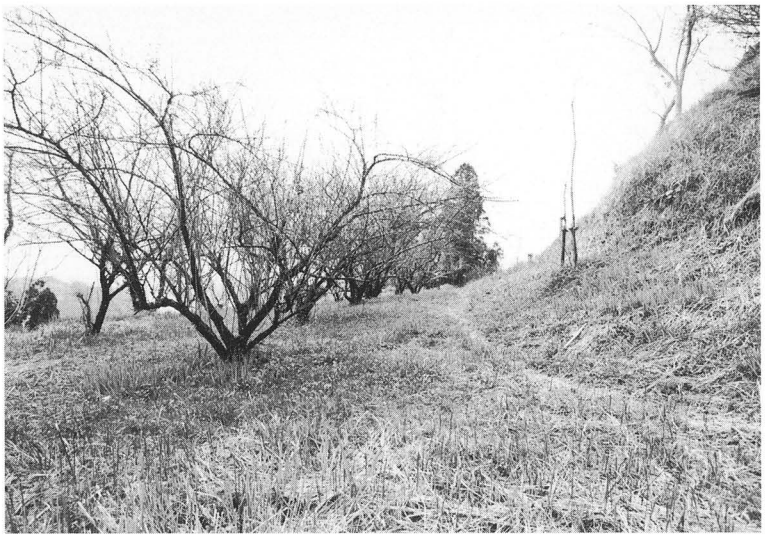
曲輪12近景（東から）

曲輪11近景（南から）



大手門跡（南から）

曲輪13近景（北から）

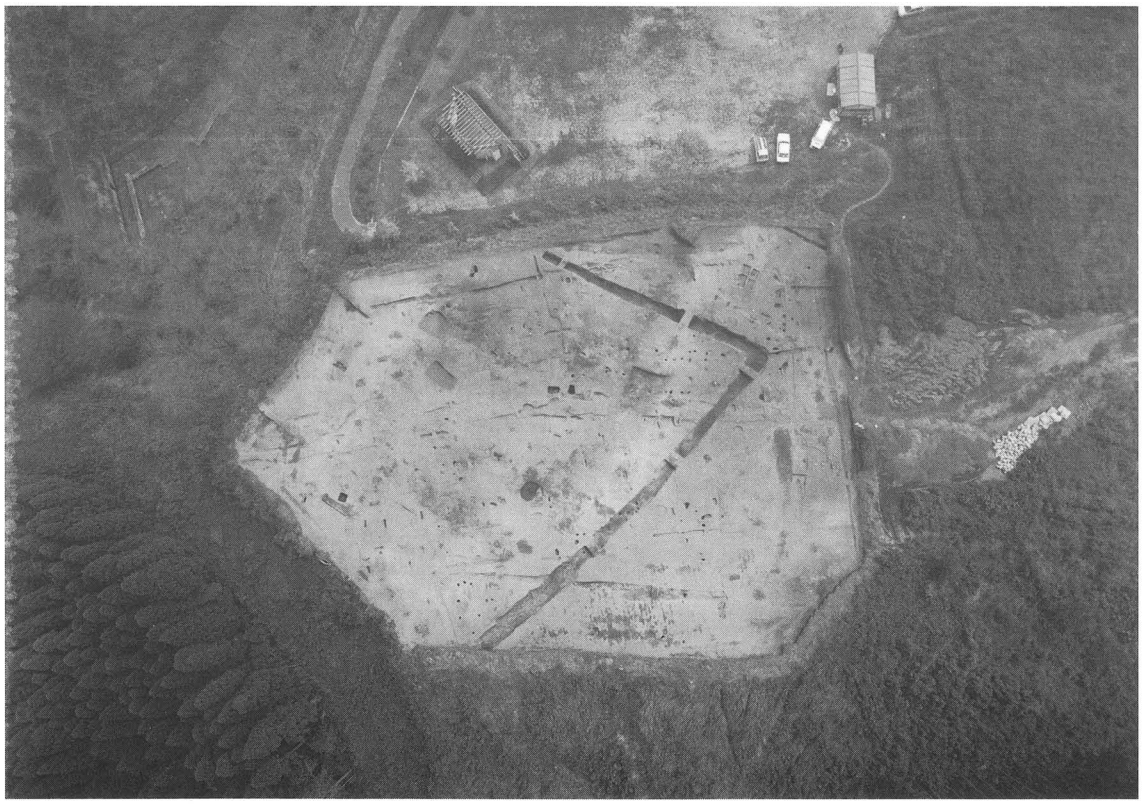


堀Ｆ近景（北から）

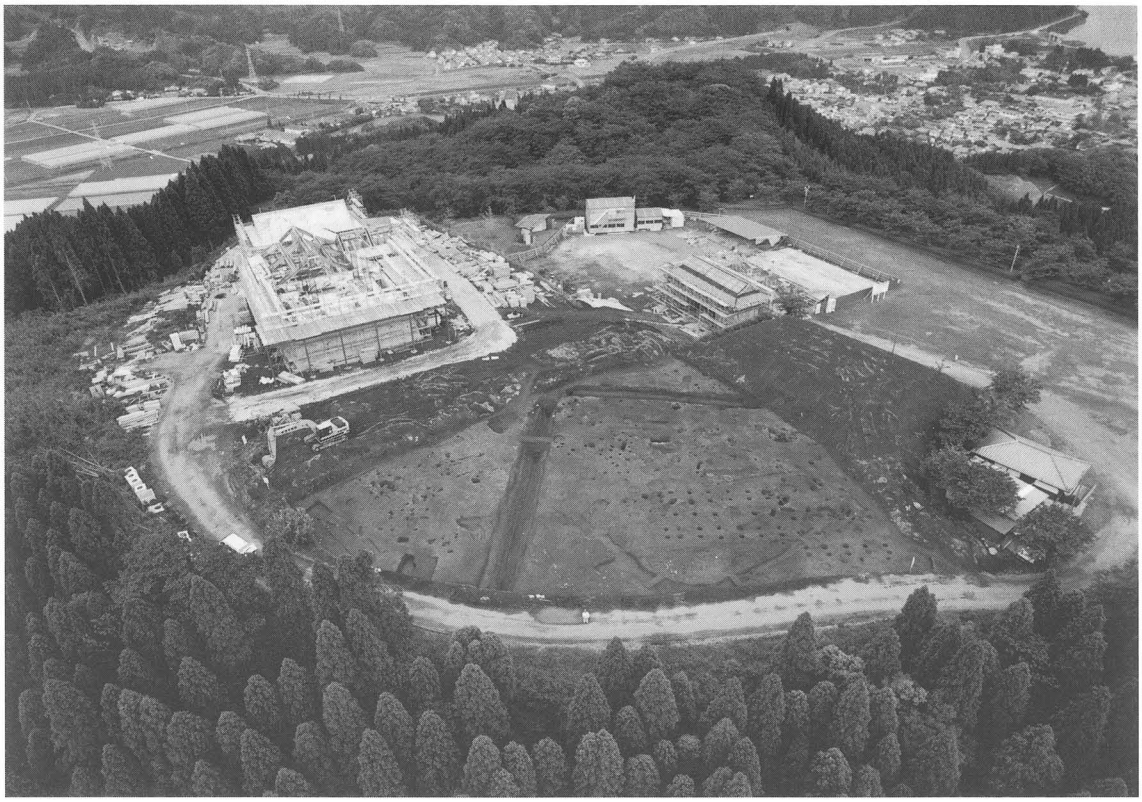
搦手門周辺から下を見る（北から）

図版 4

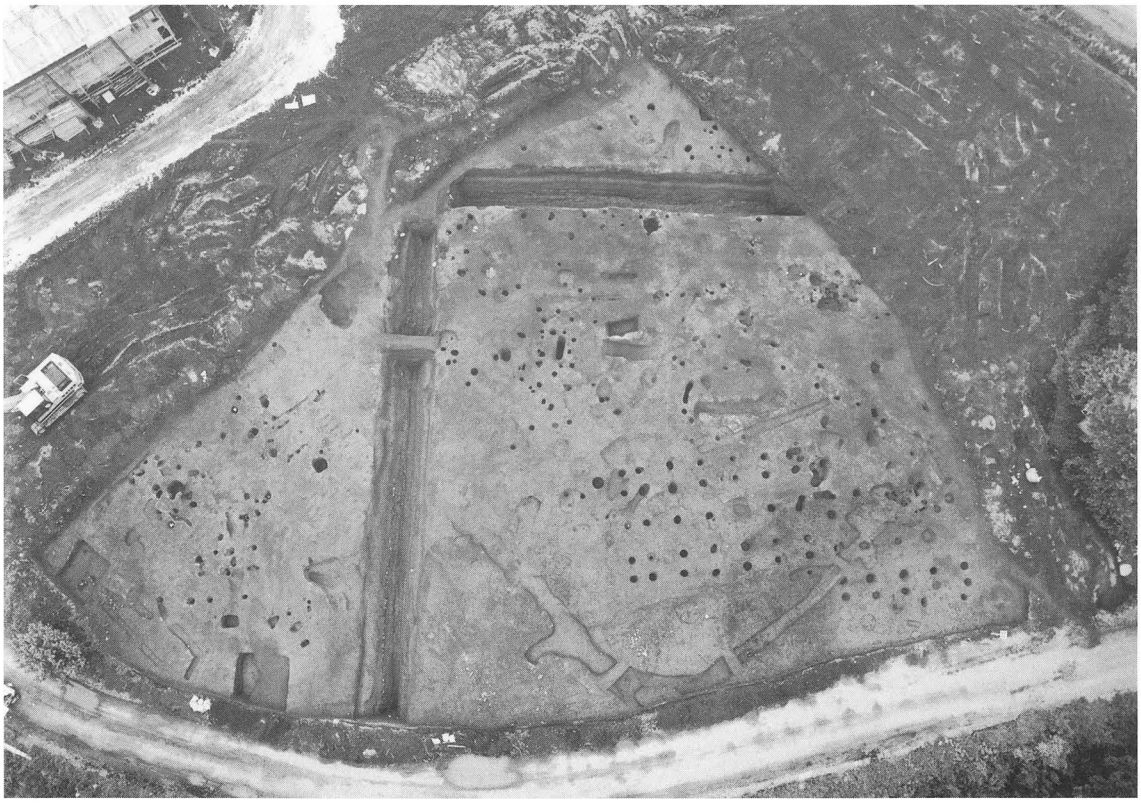
1 区全景（西から）



1 区全景



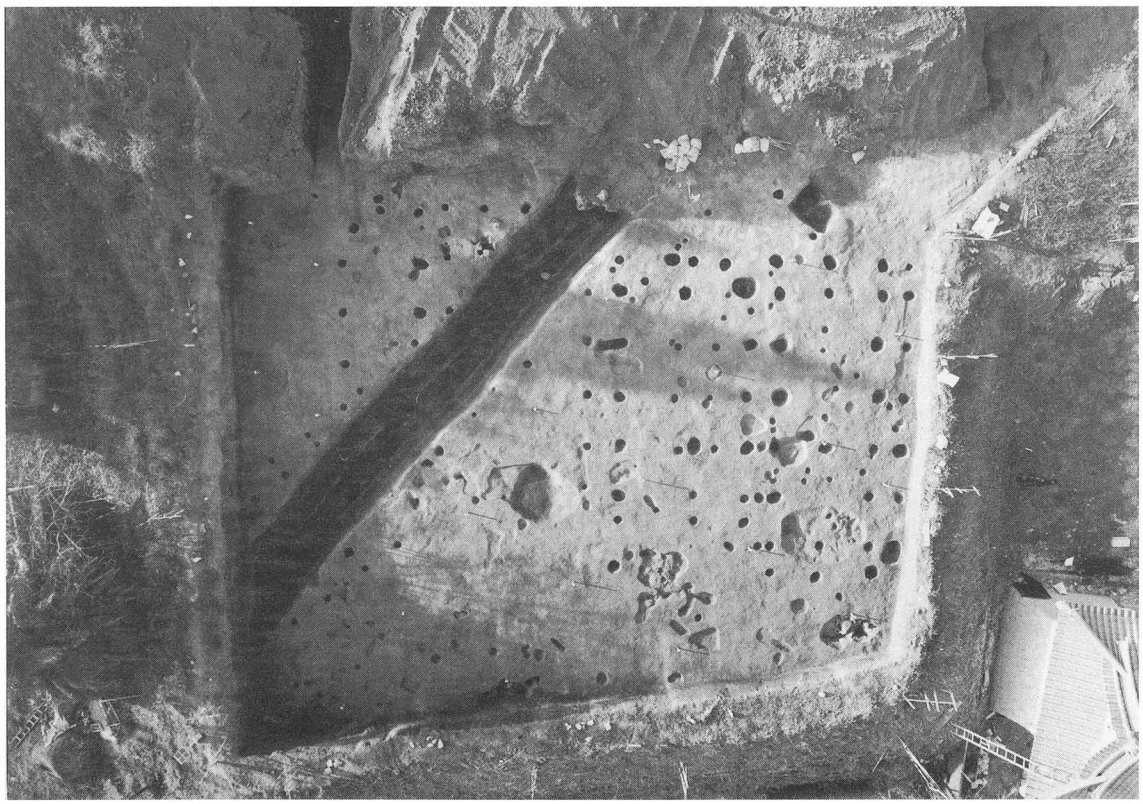
3 区全景（西から）



3 区全景

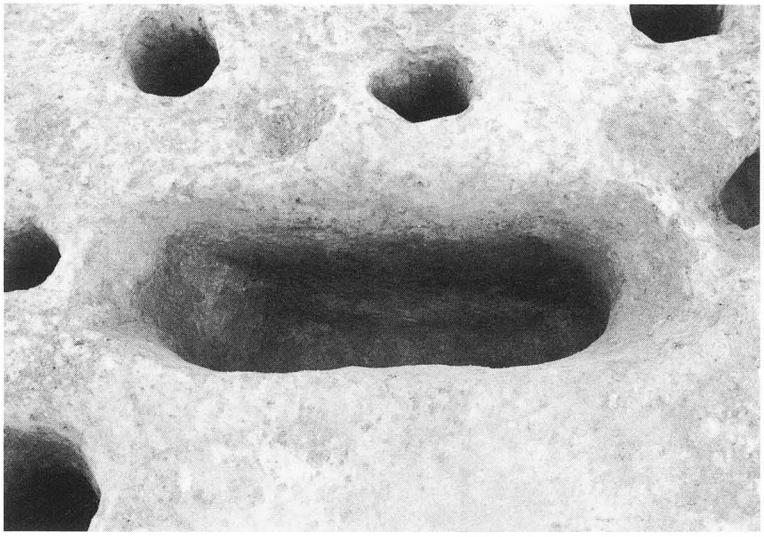
図版 6

4 区全景

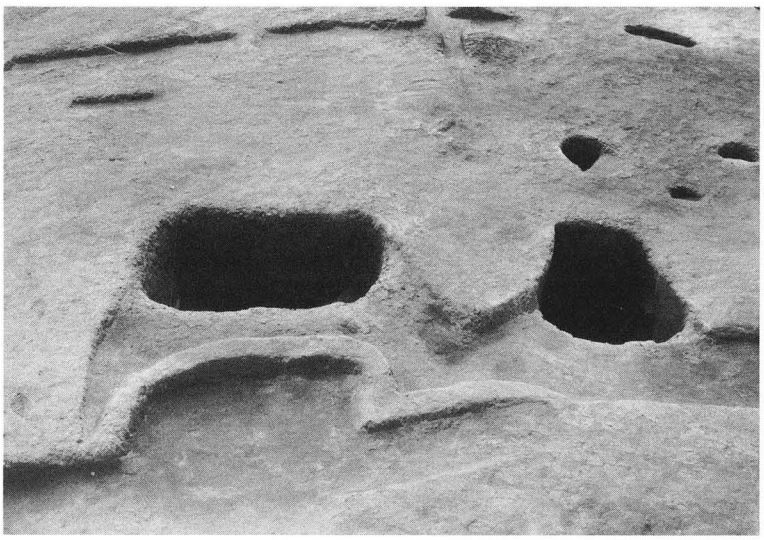


5 区全景

1 号土坑



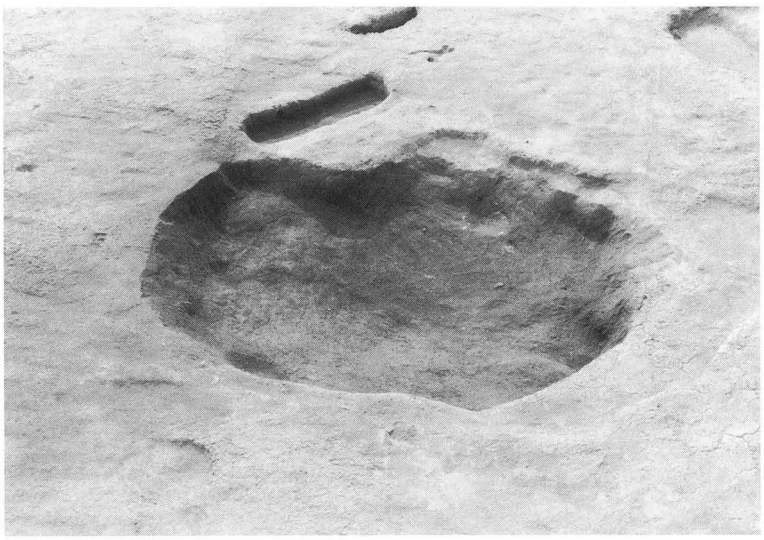
3 号・4 号土坑（北から）



3 号土坑（北から）

図版 8

4 号土坑（南から）



2 号土坑

1 号溝（南から）

1 号溝東側断面（東から）

2 号溝（南から）

6 号溝南側（西から）

図版10

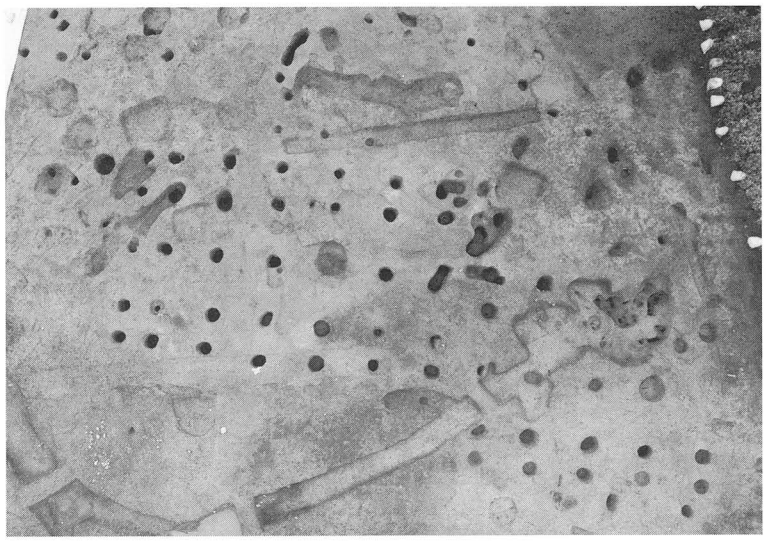
6号溝西側（東から）

6号溝西側断面（東から）

6号溝南側断面（北から）

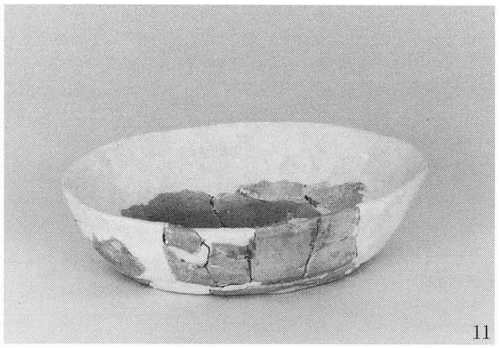
6号溝南側遺物出土状況（南から）

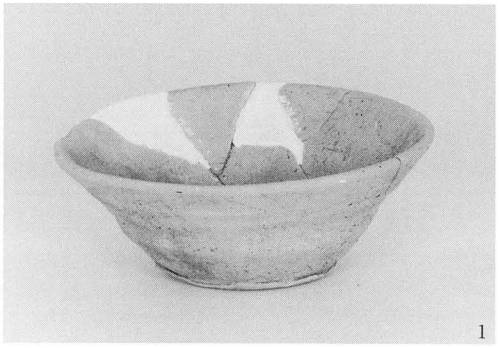
5号・6号建物跡

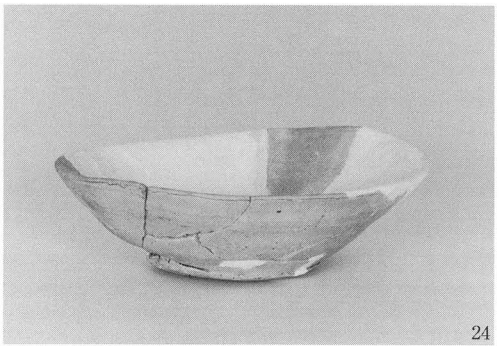


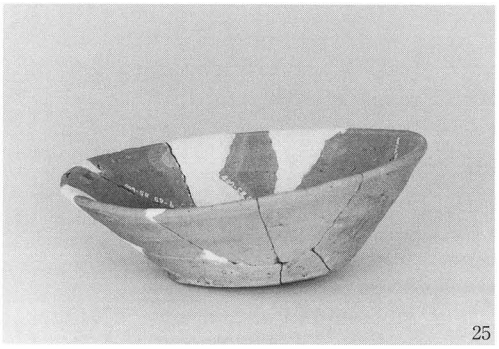
8号建物跡（西から）

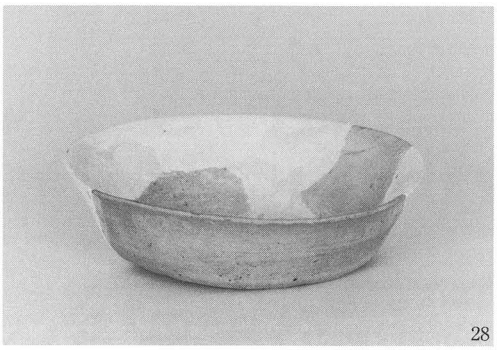
22

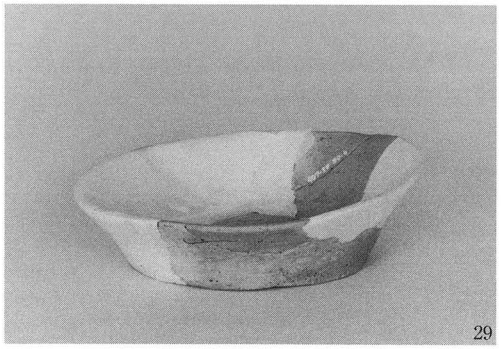

11

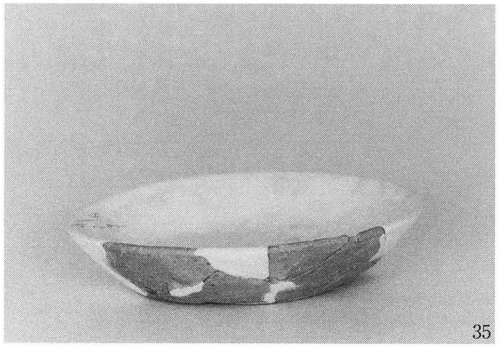

1


24

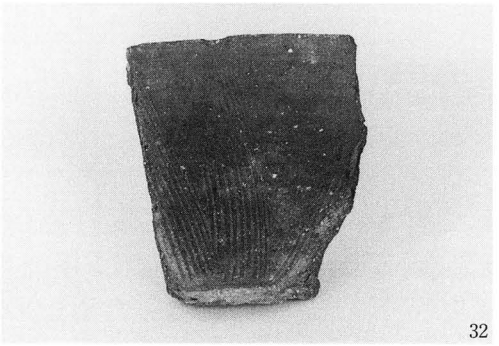

25


28


29


35

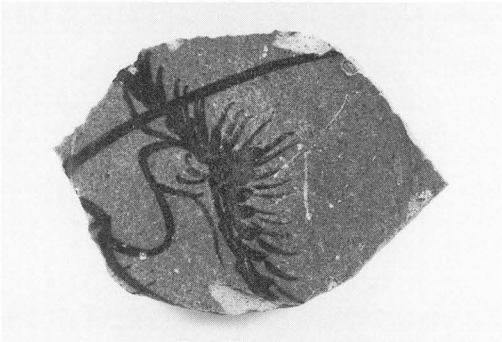
2

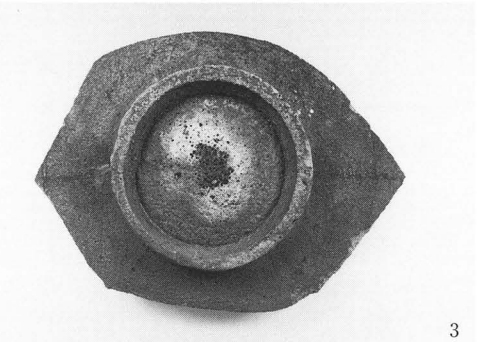

32

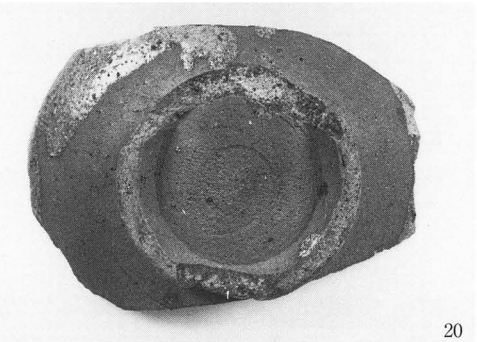
出土遺物(1)

33

39




3


20

出土遺物(2)

表5　報告書登録抄

フリガナ	アマガジョウアト
書名	天ケ城跡
副書名	地域づくり事業（天ケ城公園整備）に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第 1 巻
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 16 集
編集者名	島田正浩
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	1998年3月31日

収蔵遺跡名	所在地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あまがじょうあと 天ケ城跡	東諸県郡 たかおかちょう 高岡町 おおあざうちやま 大字内山 3003-56	45-381	407	31° 57′ 50″	131° 17′ 33″	1991. 6 ～ 1992. 10	7,000㎡	公園整備

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地 城館跡	縄文 古代 中世 近世	集石遺構、陥し穴状遺構、土坑 堀立柱建物跡　溝状遺構	押型文土器 陶磁器、 土師器	

高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集

天ヶ城跡　下巻

1998年３月

編集・発行　高岡町教育委員会
〒880-2221
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
TEL.0985-82-1111

印　　刷　株式会社宮崎南印刷
〒880-0911
宮崎県宮崎市大字田吉350-1
TEL.0985-51-2745

宮崎医科大学附属図書館

天ヶ城跡　下巻
付図　天ヶ城跡遺構図